

ジェフリー・チョーサー作

『善女列伝』(2)

ー性愛に殉じた聖女伝集ー

地村 彰之・笹本 長敬*訳

岡山理科大学教育学部中等教育学科

*大阪商業大学元教授

(2017年10月23日受付、2017年12月4日受理)

1386年ごろのチョーサーについて

『トロイルスとクリセイデ』(1372年頃-1386年)では、クリセイデの不実を語らざるを得なかった詩人であったが、その筆跡は優しさに満ち溢れている。しかし、女性の裏切りを主題とした作品の中に位置づけられたため、今度は裏切られる女性を主題とした作品『善女列伝』を書く必要に迫られたという。宮廷にいる女性たちに対する丁重な配慮が働いていたとも考えられる。

“Tendre-herted, slydyng of corage” 〈「気立ては優しいが、優柔不断」(笹本訳2012:173)〉は、クリセイデの性質を要約した一行である。父親がトロイアを抜け出し敵対するギリシア側に逃亡した。残されたトロイアで必死に生活し、身の安全を守ってほしいとヘクトルに懇願した。自らの“honour”を大切にしながらも周囲との関係を大事にしているクリセイデの姿が見られた。黒装束の中に光る姿を見て取ったトロイルスは恋の虜に囚われてしまう。一目ぼれの場面。トロイルスとの出会い。二人の心と心の繋がり。別離を悲しむ二人。再開の約束と約束の破断。廃墟となったクリセイデの館。トロイルスの幻覚と真実。ギリシア側でのクリセイデ。トロイルスとの約束を果たそうとするが、実行できなかったことが語りの中で伝えられる。相手側で精一杯“honour”を大切に生きようとしている。クリセイデは、「あらゆることに同情の気持ちを起こす“tender-herted”な女性であるが、“slydyng of corage”つまり、すべてに誠意を尽くそうとすれば、どれかが犠牲になってしまうという性質に通じている。彼女のあまりにも繊細な心の動きが何かもろいものを暗示するのである。これは、また彼女が愛らしい姿をみせることとも釣り合っている。」(地村1980:17)

以上のように、チョーサーは、聴衆(主に女性たち)に対して女性の気持ちの移ろいやすさを非難するようなクリセイデ像を決して作り上げてはいないのであるが、やはり周囲から女性描写について不満の声が聞こえてきたのかも知れない。そこで、女性の愛への真実を訴える作品を書く必要性が生じたと考えることができる。1386年から1389年の時期にチョーサーは『善女列伝』のプロローグを書いたと言われている。(榊井1976:134-35)

『善女列伝』プロローグ(1386年頃-(F版)、ただし1394年頃改訂(G版))の後、クレオパトラ、ティスベ、ディド、ヒュブシピュレとメーディアなどの善女が描写される。今回は、上記の女性について翻訳という形で紹介する。残りの女性たち(ルクレティア、アリアドネ、フィロメラ、フィリスそしてヒュベルムネストラ)については、次回扱うことにする。まず、忠実な男性に捧げた善女はクレオパトラとティスベである。その後、不実な男性の犠牲になったディドとヒュブシピュレ及びメーディアが取り上げられる。なお、クレオパトラは歴史上の人物であるが、それ以外のディド、ヒュブシピュレ及びメーディアは神話・伝説上の人物である。

以下に、N. コグヒル(1956)を基に、『善女列伝』が書かれた頃のチョーサー(1340年頃-1400年)の年譜を挙げる。

1385年2月 ロンドン港羊毛税関の監督官の職務代行者を雇う特権を与えられる。10月 ケント州治安判事となる。

1386年10月 ケント州選出の代議士となり、ウェストミンスター議会の議席を得る。10月 スクループ・グロウヴナ事件の証人となる。この頃オールドゲイトの市門階上よりグリニッチに転居。12月 失脚して? ロンドン港税関の二つの監督官の地位を失う。(チョーサーのパトロンであるジョン・オブ・ゴント、7月より国外(スペイン)にあり)。

1387年6月-11月 この期間中にチョーサー夫人フィリップパ死去(?)。

1388年 深刻というほどでもないが、借財をかかえ、貧窮す。

1389年 ケント州治安判事の職務を離れた。7月 王室土木工事監督に任ぜられる。(11月 ジョン・オブ・ゴント、国外より帰英)

1

クレオパトラ伝

エジプト ノ 女王ニシテ、殉教者タル
クレオパトラ ノ 伝、ココニ始マル

全エジプトを支配していた 580
プトレマイオス王*が亡くなった後、
女王クレオパトラ*が統治した。
その統治は、ローマから一人の元老院議員が
派遣されてやって来る事件が起こる時*まで続いた。
派遣されて来たのは、当時のローマの慣わしの通り、
エジプトの諸領土を征服して、ローマの町の誉れとし、
世界をローマに従わせるためだった。
実を言うと、アントニウス*というのが彼の名前だった。
たまたま、〈運命の女神〉は彼に面汚しをする
思いを抱いていたのだが、
彼が栄耀栄華を極めていた時のことで、 590
彼はローマの町に謀反を企てる事件を起こした。*
さらに、彼はカエサルの姉*を、
彼女の気づかぬうちに、不実にも捨ててしまった。
どうしても別の妻がほしかったのだ。
そのためにローマともカエサル*とも仲違いした。 595
そういう人ではあるが、実はこの元老院議員、
まことに品のよい立派な戦士だったから、
彼の死はまことに大きな痛手だった。
しかしこの男、激しい愛の情欲に引きずり込まれ、
愛の罠にはまってその中で雁字搦めにされていた。 600
すべてクレオパトラへの愛のため、
そのため世事に何の価値もおかなくなった。
彼にはクレオパトラを愛し、仕えること以上に、
義務として果たすべきものは何もないように思われた。
彼女自身と彼女の権利を守るためには 605
武器をとって死ぬことも厭わなかった。
一方、この気高い女王も、この騎士を熱烈に愛した、
彼の勲功と騎士らしい振舞いの故に。
確かに、本に嘘がなければ、
彼の人となりと高貴な振舞いと、 610
良識と大胆な行為については、
この世で生を送るだれよりも目立っていた。
また女王は五月の薔薇のように美しかった。
手短かに話を綴るのが一番いいからそうするが、 614
彼女は彼の妻になり、思い通りに彼を我が物にした*。
この結婚式とその祝宴についてくわしく語るとは、
大変多くの物語を詩にするという、
とてつもない企てを試みる私にとって、あまりにも

長くなりすぎることだろう、より効果があって 619
重要性のあるものについては省略しないようにする。
船や小舟に荷を積み過ぎるといことはよくあるから。
それ故に結論まで飛んで、
その間にある残余すべてをやり過ごそう。
この行為に憤ったオクタウィアヌス*は、 624
ライオンの如く猛々しく、屈強なローマ兵たちを連れ、
アントニウスを完膚なきまでに打ち破ってやろうと
アントニウスを攻撃する軍隊を率いる準備をした。
兵士たちは乗船したから、彼らを出帆させよう。 628
アントニウスの方は用心深かったから、できるだけ、
ぬかりなくこのローマ人たちを迎え撃とうと望んだ。
彼は計画を立て、ある日のこと、妻と彼の二人と、
彼の全軍は、もはやぐずぐずなどせず、 632
ただちに出陣して、船に乗った。
海上において*ローマ軍と渡り合うことになった。
ラッパは高鳴り、関の声はあがり、矢玉は飛び交い、
両軍、太陽を背にして攻撃しようと試み、 636
大砲は恐ろしい音を立てて発射され、
兵士たちは猛烈な勢いでいっせいに飛び出して行き、
頭上から大石が落ちて来る。
鉤のいっばいついた引っかけ錨*が随所で掛かり、 640
鎌鉤がロープを切るために突然飛び込んでくる。
兵士と兵士は 鉞 を持って肉薄し、
一方の兵士はマストの後ろに逃げ出す、
が、再び飛び出して、相手を船外に突き落とす。
ある兵士は槍の先で敵を突き、 645
ある兵士は大鎌のような鉤で帆を引き裂き、
ある兵士は苦杯*を持参して、仲間たちを楽しめと言い、
ある兵士は豆を撒いて甲板を滑りやすくする。
兵士たちは石灰*で詰まった壺を抱えて一斉に走る。
こうして日がな一日、敵味方、戦いに費やし、 650
万事終わりがするように*、ついに
アントニウスは敗れ、敗走し、
全力を尽くした部下の面々も四散する*。
女王もまた、あられの如くにおびただしく降ってきた
飛び道具の急襲を受けて、紫の帆を上げて逃れ行く。
耐えられなかったのは無理もない。 656
アントニウスはその思わぬ光景を見ると言った。
「ああ、生まれた日が悪かった、呪わしいなあ！
今日という日にわしの面目はこうしてなくなった」
そして絶望から冷静さを失い、 660
その場から遠くに落ちのびる前に、
すぐに自ら心臓を突き刺してしまった*。
彼の妻*はカエサルの慈悲を得られなかったので、
恐れと苦悩に満ちてエジプトに逃げ帰った。 664
しかしお聞き下さい、優しい言葉を口になさる皆さん、

愛する人が腹を立てれば、死にたいと、
 何度も嘘の誓いをする男の皆さん、
 女はどんなに誠実であるか、ここにお見せしよう。
 この悲しみに打ちひしがれたクレオパトラは
 筆舌に尽くしがたいほど悔いて嘆いた。 670
 明るる朝、彼女はもう居ても立ってもいられず、
 匠^{たくみ}たちに命じて
 エジプト中で見つかる限りの
 ルビーと宝石からなる廟を造らせ、
 その廟に芳香剤をいっぱい置き、 675
 遺体に香りを満たして防腐処置を施して、
 遺体を廟に運んで、その中に入れて閉ざした。
 それから彼女は廟の隣に穴を掘らせ、
 得られる限りの蛇を
 その穴に入れて、こう言った。 680
 「ねえ、あなた、悲嘆の心の私は完全にあなたに
 従いましたから、私は快くあなたのものになると
 ——わが騎士様、アントニウス、あなたのことよ——
 お誓いしたあの幸せな時から
 昼も夜も、目覚めている間は、 685
 幸せにつけ悲しみにつけ、歌うにつけ踊るにつけ、
 あなたのことが念頭から離れることは
 ありませんでした。
 それから私は自分自身にこんな誓約もしました。
 幸せにつけ悲しみにつけ、あなたが感じることを
 私も感じ、私の力の及ぶ限り、 690
 常に私は女の道を申し分なく務め、
 生きようが死のうが、同感してまいりましょう——
 そして息の続く限り、この誓約を履行致しましょう。
 そうすれば、恋人にこれほど誠を尽くした女王は 694
 未だかつていなかったことが明らかになるでしょう」
 そう言うと、一糸まとわぬ姿になって、健気にも、
 *蛇のいる穴の真ん中に飛び込み、
 その穴に埋葬してもらう方法を選んだ。
 まもなく毒蛇が彼女を咬み始めると、
 彼女は大事なアントニウスへの愛のために 700
 晴れやかな顔つきをして死を受け入れたのである*。
 これは史実であって、虚構ではない。
 さて、男がこのようにうそ偽りがなく
 変わる事がないと分かり、
 愛のためにその男の死を快く受け取ろうとするまで、
 私たちに頭痛が決して起こりませんように！
 アーメン。 705

殉教者タル、クレオパトラ ノ 伝、
 ココニ終ワル

2

ティスベ伝

殉教者タル、バビロン ノ ティスベ ノ 伝、
 ココニ始マル

むかしバビロン*でこういうことが起こった。
 セミラミス*女王は、その都市の周りに、
 堀を掘らせ、よく焼いた堅い煉瓦の大変高い
 壁を巡らせるということをしたのである。
 この堂々たる都市に、大変名声を博している 710
 二人の貴族が住んでいた。
 彼らは緑地に隣り合って居住し、
 隔てるものといえば、石の壁しかなかった、
 だが大都市ではよくあることだった。
 実を言えば、一方の貴族には一人の息子がいて、 715
 この貴族はその国の最も勢力のある一族だった。
 他方の貴族には一人の娘がいて、その娘は、
 当時東^{オリエント}方に住む人びとのうちで最も美しい人だった。
 それぞれの名前は、近所にいた女性たちの
 口から広まって、相手に伝わった*。 720
 何しろ、もちろんのことだが、その国ではまだ、
 娘たちは、愚かなことをするといけなからと、
 警戒心の故に、厳重に守られていたからである。
 この若者はピラムスと呼ばれ、 724
 娘はティスベと呼ばれたと、ナゾ*はかく言っている。
 それから二人の評判は噂によって大いに広まっていき、
 歳を重ねるにつれて、二人に恋心が募っていった。
 双方の父親たちが結婚に同意していたなら、
 二人は、彼らの年齢からいって、
 きっと、結婚していただろう。 730
 二人は等しく愛に激しく燃えたので、
 友達は誰一人彼らの熱愛をとめることができず、
 二人は何らかの機会を利用して、依然として巧妙に
 密会し、自分たちの恋情を打ち明けた。
 燃える石炭を覆えば、火はさらに熱くなるように、 735
 恋を禁じれば、恋の炎は十倍にも燃えさかるもの。
 二人の間に隔てて立つこの壁には、
 建設の昔から、上から下まで、
 真二つに割れているところがあった。
 だがこの割れ目は非常に狭くて小さかったので、 740
 少しも人目につかなかった。
 しかし恋人には見えないものといって何があろうか。
 実を言うと、二人の恋人たちよ、あなたたちが
 最初にこの小さくて狭い割れ目を見つけたのだ。
 告解の声に劣らぬひそやかな声で、 745

彼らは割れ目から言葉を交わした。
 その場所に立っている間じゅう、
 恋の嘆きや悲しみをすべて語り合った、
 そうできる^{たび}度に思い切って打ち明け合ったのだ。
 壁の一方にピラムスが立ち、 750
 反対側にティスベが立って、
 相手の甘い言葉を受けた。
 こうして彼らは自分たちの番人たちを欺き、
 毎日この壁に背し文句を言い、
 これを打ち倒してほしいと、神に望んだ。 755
 こうして二人は言うのだった、「ああ、邪悪な壁よ、
 お前の妬みによって私たちは妨げられています。
 なぜお前は真二つに裂けるか崩れるかしないの？
 お前はそうすることを望まないなら、少なくとも、
 一度だけでもいいから、私たち二人を会わせてほしい。
 それが叶わなければ一度甘いキスをさせてほしい。
 望みが叶うと、苦しい恋の悩みを癒せるでしょう。
 そうは言っても、まだ私たちはお前に恩を着ています、
 お前は漆喰や石の間から、言葉を
 交わすことを、許してくれているから。 765
 当然お前に不満を抱くべきではないね」
 二人は冷たい石の壁にキスし、
 こういった空しい言葉を発し終わると、
 いとまごいをして、去って行くのだった。
 これは、なるべく夕暮れか、 770
 早朝に、人目を忍んで行なわれた。
 彼らは長い間このように続けたが、
 ある日、日の神ポイボス*が明るく輝き始めると—
^{しのめ}
 東雲のアウロラ*は自分の熱線を用いて、
 湿った草の露を乾かした*—— 775
 いつものように、この裂け目に
 ピラムスがやって来て、そのあとティスベが来て、
 二人はまことの心から次の約束を入念に誓い合った。
 それは、その夜、こっそり抜け出して、
 それぞれの番人を欺き、 780
 町から出ようということだった。
 野原は非常に広かったので、
 ある時刻に、ある場所で会うために、
 二人が会うべき場所として意見が一致したのは、
 一本の木の下にニノス王*が埋葬されている所—— 785
 偶像を崇拝した昔の異教徒たちは
 当時野原に埋葬されることになっていたから——
 この墓所のすぐそばに泉があった。
 この話を手短かに話すと、
 この約束はただちに賛同され実行されたが、 790
 二人には太陽が長くとどまり、
 なかなか海の下に沈まないように思われた。

ティスベには恋の情欲が非常に大きく占めていたので、
 ピラムスに無性に会いたくてたまらなかった。
 時を見計らって、 795
 顔に修道女のベール*のようなものを巧妙に覆って、
 夜、ひそかに抜け出した。
 彼女は友達をすべて捨てたのだ、
 ——約束を守るために——。ああ、今まで女が
 男を信頼して誠実でありすぎたということは、 800
 たとえ男をもっとよく知らなかったとしても、
 なんと気の毒なことだろう。
 彼女はその木の^{もと}許に急いで行くのである。
 この場合恋が彼女をこれほど大胆にさせたからだが、
 彼女はその泉のそばでじっと座って待っていた。
 ああ！ その時、なんと野生の雌ライオンが、 805
 もはや一刻の猶予もなく、森からやって来るとは、
 獣を噛み殺したことによる、血だらけの口をして。
 彼女が座っている傍らの泉の水を飲むためだった。
 ティスベはそれを見ると、
 恐ろしさのあまり、飛び上がり、 810
 おびえた足取りで*洞窟の中に逃げ込んだ。
 実は月明かりでライオンがよく見えたからだ。
 彼女は逃げる時ベールを落としてしまった、
 それに気づかなかったが、ひどく脅えていたので、
 逃げ果^{おお}せたことが大変うれしかった。 815
 こうして座って身じろぎもせず闇に隠れていた。
 雌のライオンは水をたっぷり飲み終わると、
 泉の周りを回り始めた。
 するとすぐにベールを見つけ、
 血だらけの口でそれを引き裂いた。 820
 これを済ますと、ライオンはもはやとどまることなく、
 森に向かって去って行った。
 やっとピラムスはやって来た。
 ああ、彼は家に長居し過ぎたのだ！
 月は輝いていたので、よく物が見えた、 825
 道すがら、急いでやって来ながら、
 地面に目を落とした、
 見ると、砂の上に、
 ライオンの大きな足跡があるのが目に入った。
 すると突然、心中に恐怖が走り身震いした。 830
 顔は青ざめ、それとともに髪は逆立った。
 さらに近づくと、引き裂かれたベールを見つけた。
 「ああ、生まれた日が呪わしい！
 一夜にして僕たち恋人二人とも命を絶たれるなんて！
 僕はあなたを死なせてしまった張本人でありながら、
 ああ、ティスベ、どうして許しを求められようか！
 この度^{たび}は僕が願ったばかりにあなたの命を絶つ羽目に。
 ああ、女性に危ないことが起こりそうな場所へ、

夜に行くように求めるなんて！
 それに、僕がひどく遅れたためだ！ 840
 ああ、一足早くこの場所に来るべきだった！
 さあこの森にいるどんなライオンでもいいから、
 僕の体を引き裂いておくれ、さもなければ
 どんな野獣でもいい、さあ僕の心臓を齧^{かじ}っておくれ！」
 そう言ってベールのところに飛んで行き、 845
 ベールに何度もキスし、ベールに激しく涙を流して、
 言った、「ああ！ベールよ、もう為すすべはない、
 お前がティスベの流れる血に触れたからには、
 同様に僕の血も触らせてやろう、ただそれだけだ！」
 そう言って彼は心臓に剣をぐっと突き刺した。 850
 血は傷口から、まるで樋^{とい}が壊れた時
 水が流れ出るように、どっと迸り出た。
 さてこのことを知らないティスベであったが、
 恐怖の中で座りつづけながら、こう思った。
 「ピラムス様がここに來られて、 855
 私を見つけることがおできになれないなら、
 私を嘘つきで不実な人とお思いになるかもしれない」
 そこで彼女は外へ出て、心を配り、
 目を配って、彼を探し始めながら思った、 859
 「雌ライオンが恐ろしかったことをお話ししましょう、
 私のとった行動はびくびくものだったことも」
 ついに恋人を発見した。
 彼は踵で地面をたたきながら、血だらけになって
 倒れていた。それを見てはっと飛びのいた。
 心臓は波のように打ち、 865
 黄楊^{つげ}のように真っ青になったが、即座に
 思いめぐらし、彼であること、
 愛する大事なピラムス様であることが分かった。
 誰が書けようか、その時ティスベはどんな悲壮な
 顔になったかを、どのように髪を引きちぎったかを、
 どのように自分を責めさいなんだかを、 871
 どのように卒倒して地面に倒れたかを、
 どのように彼の傷口に涙をいっぱい注いだかを、
 どのように彼の血を掻き混ぜんばかりに嘆いたかを、
 どのように彼の血で自分の身を朱に染めたかを、 875
 どのように遺体をしっかり抱いたかを、ああ悲しい！
 この場合悲嘆のティスベはどのようにするかを！
 大変冷たい彼の凍る唇にどのようにキスをするかを！
 「誰がこれをしたの、誰がこんなに大胆不敵だったの、
 大事な人を殺すなんて、ああ、話して、ピラムス様！
 こう呼びかけている私は、あなたのティスベよ」 881
 そう言って、彼女は彼の頭を持ち上げた。
 まだ虫の息だったこの気の毒な若者は、
 ティスベという名を叫んでいるのを聞いた時、
 彼女に重い死の眠りにつく眼^{*}を向け、 885

それから再び顔を下ろして、息絶えて死んだ。
 ティスベは物音も声も出さずに静かに立ち上がると、
 自分のベールと彼の中身の無い鞘が見えた、
 彼を死に至らしめた彼の剣も目に留まった。 889
 すると彼女はこう言った、「悲嘆に暮れるこの手には
 大それた行ないをする力がまだ十分残っているわ。
 愛はわが身に十二分の傷をつけるぐらいの
 力と勇気を私に与えて下さると思いますもの。
 私はあなたのあとを追って死に、あなたの死の
 道連れとなり、あなたを死なせた張本人となります。
 私からあなたを引き離すものは、 896
 ただ死以外、本当に何もありませんけれど、
 あなたは死から離れられないのと同様に、私から
 もう離れられませんよ、私はご一緒しますから。
 さて、あわれな嫉妬深いお父様がたよ、 900
 私たちは今まであなたがたの子どもでありました。
 もう嫉妬なさらずに、お父様がたにお願いします、
 私たちを一つの墓の中に置いて下さい、
 愛のためにこの悲しい最期を遂げたのですから。
 そして正義の神様、願わくは真実愛し合っている 905
 すべての恋人たちに、ピラムスとティスベが今まで
 経験したより多くの幸せを授けて下さいますように！
 いかなる高貴な女性にもこのような清水^{きよみず}の舞台から
 飛び降りるような冒険をおさせになりませんように。
 女は愛することにおいて、男よりも 910
 誠実でないということは断じてございませんもの！
 私はと言えば、それをすぐにお見せ致しましょう」
 そう言って彼女は、恋人の血でまだ温かい、
 恋人の剣をすみやかに取って、
 自ら心臓に突き刺した。 915
 こうしてティスベとピラムスはこの世を去った。
 私のすべての書物の中を探してもこのピラムス以上に
 誠実で心優しい男は、ほとんど見当たらない。
 だから彼についてこうしてお話したのである。
 恋に真実で誠実のままいられる男を見つけることは
 われら男にとって嬉しいことだから。 921
 ここでお分かりだろう、男はいかなる恋人であろうと、
 女は男に劣らず勇気があり分別があるということを*。

ティスベ ノ 伝、ココニ終ワル

3

ディド伝

カルタゴ ノ 女王ニシテ、殉教者タル
ディド ノ 伝、ココニ始マル

マントアのウェルギリウス*よ、あなたの名に
栄光と誉れあれ！ 私は、できる限り、 925
あなたが先導する、あなたのカンテラの灯に従い、
アエネアス*がどうしてディドに偽誓したかを語ろう。
あなたの作品『アエネイス』とナソ*に、
物語の筋をとり、この主題を詩にするつもりだ。
ミネルワ*に捧げた馬だと偽る、 930
ギリシア人の策略により、特にシノン*の^{はかりごと}「謀」により、
トロイア*が破壊された時、
実に多くのトロイア人は落命せざるを得ず、
勇士ヘクトル*は、戦死後、亡霊となって現れた。
そしてその町の本丸だった 935
イリウム*の名塔に火が入って
炎は狂奔^{きようほん}し、手の施しようもなく崩れ落ち、
トロイアの国全体は衰微してしまい、
プリアモス*王は殺されてこの世にいなくなり、
アエネアス^アはウェヌスから、逃げるよう 940
命じられ*、息子であったアスカニオス*を、
右手に取って連れ*、
背中にはアンキセス*と呼ばれる
年老いた父を背負って逃れて行ったが、
逃れる途中、妻クレウサ*を見失ってしまう。 945
彼は仲間の者たちを見つけるまで、
心は多くの悲しい思いに占められた。
しかし、やっとのことで仲間たちを見つけると、
決められた時間のうちに用意して、
急いで海に乗り出し、 950
仲間と共に、運命の望むままに、
イタリアを目指して航行する。
海で遭遇した数々の冒険について
ここで述べるつもりはない。
この主題にふさわしくないから*。 955
すでに言ったように、私の話は、
話が終わるまで、彼とディドの話になるだろう。
彼は長い間塩辛い海を旅して、
やっとのことでリビア*にたどり着いたのだが、
七隻の船しか残らず、もはや船団ではなくなっていた。
嵐に揺さぶられてひどく参っていたので、 961
上陸できることを喜び、心が逸った。
停泊地に着くと、

彼にはアカテスと呼ばれる一人の騎士がいたが、
彼を部下の騎士仲間内から選び、その国を 965
偵察するために、連れて出かけることにした*。
彼はアカテスだけを伴い、もう大勢の仲間を連れずに、
出発した、船を停泊させたままにして、
この同伴者と彼だけで、どんな案内人も伴わなかった。
リビアの荒野を長い間歩いて行くと、 970
ようやく一人の女狩人*に出会った。
彼女は手に弓と矢を持ち、
服は膝の上で短く切られていた。
彼女は今まで〈自然の女神〉が創造したうちで
最も美しい女性だった。 975
アエネアスとアカテスに挨拶して、
向かい合うと、このように話しかけた。
「あなたがたは広く旅して来られたようですから、
妹たち数人がお側を通るのを見かけませんでしたか。
彼女たちはこの森で狩った 980
野猪か別の獣を携え、籠に矢を
差し込んで、裾をたくし上げた出で立ちです*」
「いいえ、本当ですよ、奥方」とアエネアスは答えた。
「ところであなたの美しさから推測しますに、私には
あなたはどうしてもこの世の女のように思えません。
日の神アポロンの妹君と、私は推測します。 986
もしあなたが女神であられるならば、
われらが蒙った苦しみと悲しみにお慈悲を垂れ給え」
「私は女神じゃありません、本当ですよ、
この国では、女はこのように、 990
弓矢を携えて歩くのです。
あなたがたが今おられるこの地はリビアの国ですよ。
ディド様が女王様です*」——
そう言って、ディドがなぜこの国にやって来たか
彼にその事由をすべて手短かに話した、 995
その事について今のところ韻詩にして話したくない。
必要ないだろう、時間の損失になるだけだから。
これだけだったし、このように彼と話を交わした人は、
彼の母、ウェヌスだったからである。
彼女は彼にカルタゴへ向かうように命じて、 1000
まもなく彼の視界から消えた。
一語一語ウェルギリウスに従って話していきたいが、
そうすればあまりにも長く話が続くことになるだろう。
ディドと呼ばれたこの高貴な女王は、
かつてはシュカイオス*の妻で、 1005
明るく輝く太陽よりも美しく、
カルタゴのこの立派な町を創始したのである。
彼女はこの町をまことに誉れ高く統治するので、
気高さ、心の寛さ、美しさにおいて、
全女王の花と見なされ、 1010

彼女に一度でも会うことができた男は果報者だった。
 彼女は王たちや諸侯たちに強く望まれた。
 彼女の美しさは世界中を深く感動させたからである。
 彼女はそれほどすべての人に高く評価された*。

アエネアスはこの地へ来て、 1015
 この町の本山へとやって来ると、
 そこで折しもディドはお祈りを捧げていたのだが、
 彼は人目を忍んでそこへ赴いた。
 この大きな寺院に入ると、 1019
 こういうことが可能であるかどうか分からないが*、
 ウェヌスが彼を人から見えなくしていたのである——
 例の書物は嘘偽りなくそう言っている。
 アエネアスとアカテスは、
 この寺院の至る所を歩きまわっていると、
 トロイアとその全土が破壊された次第が、 1025
 壁に描かれているのを見つけた。
 アエネアスは言った、「ああ、生まれたことが悲しい！
 われらの恥が世界中に広く知られてしまい、
 もうそれが至る所で描かれているのだ。
 かつて繁栄していたわれらは、 1030
 今は面目をなくしてしまい、このような状態では、
 私はもはや生き続けられない」
 そう言って突然感極まって泣き出したので*
 見るも可哀想なことだった。
 この町の女王たる、この清々しい貴婦人は、 1035
 王の地位に相応しい立派な姿をして寺院の中において、
 まことに装い豊かに、その上まことに美しく、
 若々しく、快活で、眼差しも晴れやかだったので、
 天と地を造り給わった神*が、
 愛人を欲しいと思うなら、美人で、善良で、 1040
 女らしくて、誠実で、さらに上品である故に、
 この気持のよい貴婦人以外、誰を欲し愛するだろうか。
 その半分も神に似合う女性はいないだろう。
 するとこの世界を支配している〈運命の女神〉が、
 出し抜けに新たな幸運をもたらしたのである、 1045
 今までこれほど奇妙な偶然が起こったことがなかった。
 何しろアエネアスが海で失ったと思った
 仲間たちが全員、
 この都市から遠くない所にたどり着いたからである。
 そういう事情で彼の重臣中の重臣数人が、 1050
 偶然にもこの都市にやって来て、
 しかも同じ寺院に、女王を探し求めて、
 救いを乞うために、やって来ていた。
 大変な評判が彼女の善良さから生まれていたからだ。
 そして、彼らは彼らが蒙った苦難や、 1055
 遭遇した嵐や災難を語り終えた時、
 女王の前にアエネアスが姿を現した、

自分こそアエネアスだとすなおに認めた。
 その時、彼の臣下たち以外の誰が喜んだらうか、
 自分たちの主君、自分たちの導き手を見つけたからだ。
 女王は彼らがアエネアスを大いに称えるのを見て、
 これまでもアエネアスの噂をよく耳にしていたので、
 彼のような身分の高い人がこれから
 そのような身分を失うということに*、
 心の中で同情と悲しみを覚えた。 1065
 女王はその人を、いかにも騎士らしく、
 人柄と実力に充分恵まれ、
 まことに気高い人物に相応しいと見てとり、
 そして、彼は言葉の遣い方をよくわきまえ、
 とりわけ高貴な顔つきをし、 1070
 筋骨は均整がよく取れているということが分かった*。
 何しろウェヌスに似て*まことに美しく、
 美しさにかけては誰も遠く及ばないと思うからだ。
 見た目にも主君らしく見え、
 外国人であったので、彼をさらに少し好みしく 1075
 思ったのである、ああ、神の御加護あらんことを、
 人びとによってはたいてい新しい物は美味しいのだ*。
 まもなく彼女は彼の悲しみに哀れみの心を示し、
 その哀れみと共に愛も生まれた*。
 こうして、哀れみと気高い優しさを受けて、 1080
 彼は苦悩から蘇った気分になったに違いない。
 ディドは確かにこう言った、あのお方が大変な危険と
 不幸に遭遇されたことを、気の毒に思ったと。
 それから親しげな話しぶりで、次のように話しかけ、
 皆さんがお聞きになるように、こう言った。 1085
 「ウェヌスとアンキセスの御息息ではございませんか。
 私は誠心誠意をこめて、なし得る限りの
 敬意を払いまして、ご援助いたしましょう。
 あなたの船隊と御家来衆をお救いいたします」
 そう言って彼に多くの優しい言葉をかけ、 1090
 使者たちに命じた。出かけて行って、
 その日のうちに、滞りなく、
 彼の船隊を探し当て、糧食を授けるようにと。
 彼女は多くの家畜を船隊に送り届け、
 さらにワインも彼らに贈った。 1095
 それから自分の王宮に自ら急いで帰り、
 常にアエネアスに付き添って案内したのだった。
 歓迎の宴について皆さんに説明する必要はないだろう。
 アエネアスは今までこれほど寛いだことはなかった。
 宴会は山海珍味に満ち、物みな豊富に整い、 1100
 楽器や、歌謡、歓喜に溢れかえり、
 多くの艶めかしい流し目や仕掛けに満ち満ちていた*。
 アエネアスは黄泉の国の淵から
 楽園へやって来たのだ、こうして喜びに浸るうちに

トロイアでの自分の境遇について思い起こすのである。
 晩餐の後、アエネアスは綴れ織や、 1106
 豪華な寝床、飾り物がいっぱいしつらえてある
 舞踏室に案内される。

彼は女王とともにしばし座に就いて楽しみ、
 やがて薬味*は下げられ、ワインがなくなると、 1110
 すぐに私室へと導かれた。
 彼は部下たちと寛ぎ、休息し、
 皆したいことを何でもして楽しんだ。

彼への贈り物には上等の馬^{ばろく}勒をつけた駿馬*
 馬上槍試合に出かけるのに相応しい軍馬*、 1115
 実に乗り心地のよい大型乗用馬*があり、
 高価な玉でいっぱい飾られた宝石、
 黄金のいっぱい詰まった重い袋、
 夜にはきらきら輝くルビー、
 鷲を捕える優雅で誇り高い隼、 1120
 牡鹿や野猪や鹿を追い求める獵犬、
 黄金の杯、新しく鑄造されたフロリン金貨*があった。
 およそリビアの地で手に入るもので、
 ディドがアエネアスに贈らないものはなかった。
 おかげで彼が今まで費やしたものがすべて償われた。
 こうして女王が客人たちにあっぱれな人と

呼ばれるのは尤なことだった、 1126
 女王は誰にもまして度量が大きかったものだから。
 実はアエネアスも、嘘ではない、
 すでにアカテスを自分の船に遣り、
 息子を迎えにやらせ、さらに貴重な品々を、 1130
 笏、衣類、ブローチ、指輪も取りにやらせたのだ。
 身に着けるためのものもあれば、このような立派な
 品々を贈呈してくれた彼女に贈るためのものもあった。
 そして息子にはどのような態度で
 女王に贈り物を差し上げるか伝えていた。 1135
 アカテスが戻ると、
 アエネアスはうら若い息子アスカニオスを見て
 殊のほか幸せに思い、喜ぶのである。
 それにもかかわらず、作者がわれわれに語っている、
 〈愛の神〉であるクピドが 1140
 天上の母神に懇願して、
 アエネアスの子どもと瓜二つになって装い現れ、
 この高貴な女王をアエネアスにぞっこん
 惚れこませたのだと。しかしその原作の一節は 1144
 どうであれ、私はそれについてほとんど気にしない。
 しかし真相はこうである。女王はこの子どもに対して
 愛想よくもてなしたので、それを聞くと不思議に思う。
 そしてその子の父親が贈った贈り物について
 彼女は何度も心から感謝したのである。

こうして女王はこれら新来のトロイアの 1150

勇敢な人びと一同と歓楽と歓喜に浸るのである。
 それからアエネアスのいろいろな行為について
 さらにたずね、トロイアの出来事を
 ことごとく知り、一方彼らは日がな一日
 おしゃべりや遊びに夢中になった。 1155
 そこから大きな情火が燃え上がり始めた、
 次にこの愚かなディドはこの新しい客人アエネアスと
 親しく付き合いたいと強く望むようになって、
 顔色も健康も冴えなくなった。

この物語を話した理由、さあその趣意へと、 1160
 さあその骨子へと向かい、お話ししよう。
 このように話を始める。たまたまある夜のこと、
 月影が高く上がると、
 この気高い女王は寝所へ赴いた。
 彼女は深く吐息をつき、自ら苦悶し始め、 1165
 こういう恋人たちがするように、言うのを

聞いたように、
 眠れず、身悶えし、何度もはっと身を起こすのである。
 ついに、妹アンに向かって
 嘆き、それからすぐにこう話しかけ、
 「ねえ、妹や、どうしてかしら、 1170
 夢の中でどきまぎするというのは？」と言った。
 「新来のトロイアびとのことが心から離れないのよ。
 あの方はずいぶん格好良さそうに思われるし、
 男らしそうにも見えるし、
 そのうえ利害もよく心得ていらっしゃるの、 1175
 愛も命もすべてあの方に委ねてしまったのよ。
 あの方が冒険談を語られるのを聞いたことなくって？
 アン、これから、はっきりと、勧めてくれるなら、
 私、喜んであの方と結婚したいわ。
 言いたかったのはこれだけ、これ以上言うことないわ。
 私を生かすも殺すも、すべてあの方次第なのよ」 1181
 妹のアンは、ディドの良いところを知っているので、
 自分の思った通りに言って、少し異議を唱えた。
 しかしこれについて話し合いは大変長くかかったので、
 繰り返し話すのは長くくどすぎることになるだろう。
 しかし結局、ディドの気持ちに逆らえないだろう、
 愛はやっぱり愛、愛は全然止められないのだから。

夜は海から明ける。
 惚れてしまった女王は、従僕たちに命じる、 1189
 狩獵用の網と、大きくて鋭利な槍を用意するようにと。
 この元気で潑潑とした女王は狩に出かけたく思い、
 この新たな楽しい苦しみ彼女をひどく駆り立てる。
 元気のよい家来たちはみな自分たちの馬へと向かい、
 獵犬たちは中庭に持ち込まれた。
 ものすごく速い駿馬に乗った 1195
 女王の若武者たちは辺り一帯に待ち受け、
 膨大な人数の侍女たち一行も並んで待つ。

金の縞を高く浮き上がらせ、
 まことに気持ちよく装飾された赤い鞍を付け、
 紙のごとく白い*、丈夫な婦人向きの馬に、1200
 デイドは悉く金と宝石に身を包んで乗っていた。
 彼女は病気の人びとを夜の悲しみから癒す、
 明るく輝く朝のように美しい。
 火のように跳ね上がる駿馬には*——誰でも
 細い手綱で引き回せられる御しやすい名馬だ——1205
 日輪がエブスに譬えられるアエネアスは跨り、
 自分の流儀に従ってまことに華やかに装った。
 黄金の馬銜付きの泡だらけの手綱を
 彼は望み通りに操る。
 私はこうして高貴な女王に、狩に出かけてもらおう、1210
 そばにこのトロイア人を伴って*。
 牡鹿の群はすぐに見つかる。
 「それ！ 急げ！ 拍車をかけろ！ 犬を放せ、放せ！
 なぜライオンか熊が現れないのか。
 現れればこの槍で一突きにしてくれようものを」1215
 このように若者たちは叫んで、この野生の鹿たちを
 突き殺し、彼らの意のままにする。
 こうしている間に天でごろごろ鳴り始め、
 雷がものすごい音をたてて轟いた。
 雨が霰や雹を伴ってはげしく落ちてきて、1220
 天の火たる稲妻も帯同してきたので、
 この気高い女王は、そしてお付きの者たちもまた、
 ひどく怯え、それぞれその場から喜び勇んで逃げた。
 手短かに言うと、この嵐から身を守るために、
 彼女は小さな洞穴の中に逃げ込み、1225
 アエネアスも彼女と一緒に入った*。
 二人と一緒に他に誰かが入ったかどうか分からない。
 作者はそれについて語っていないのだ。
 ここで彼ら二人の間に深い愛情が
 芽生え、これは彼らの喜びの1230
 最初の朝であり、彼らの悲しみの始まりであった*。
 何しろそこにおいてアエネアスが神妙に跪き、
 彼女に自分の思いの丈と恋の苦しみをすべて打ち明け、
 幸せの時も不幸せの時も誠実であることを誓い、1234
 新たな人に心変わりしないことを深く誓ったから。
 不実な恋人は大変うまく哀訴することができるので、
 うぶなデイドは彼の苦しみを可哀想に思い*、
 二人が生き続ける限り、幾久しく
 彼を夫に相応しいとみなし、彼の妻になった。
 この後、嵐が止むと、1240
 二人は喜んで出て、家路に就いた。
 邪悪な噂が生じ、しかもすぐに、
 アエネアスが女王と共に洞穴に入ったことが
 知られ、人びとは好きなように想像した。

イアルバス*と呼ばれる王はそれを知ると、1245
 今までの生涯、彼女をずっと愛していて、
 彼女を妻にしようと言い寄っていたので、
 大変悲しみ、ひどい落胆の表情とともに、
 その嘆きを耳にするのは気の毒で可哀想なことだった。
 だが、愛においては、一方が1250
 他方の悲しみを見て笑うことは常によくあることだ。
 今はアエネアスが笑い、喜びにあふれ、
 今までトロイアにいた時よりも豊かな気分に入る。
 ああ、無垢な心にあふれ、慈悲にあふれ、
 真実と優しい感情にあふれる、薄幸の女たちよ、1255
 何によって男たちにそんなに信頼を寄せるのか。
 男たちの見せかけの悲嘆にこれほどの憐憫を抱くのか、
 以前にこのような諸々の前例があるのに。
 男たちは皆偽誓するということを知らないのか。
 どこで見かけるのか？ 恋人を捨てなかった男を、1260
 恋人に不実でなかった男を、恋人に
 損害を与えなかった男を、
 恋人から金品を奪わなかった男を、恋人に
 自分の行為を誇らなかった男を。
 こういうことは書物だけでなく、よく見かけるよ。
 さあよく気をつけなさい、この偉大な家柄の男に、
 彼女をまことにうまく喜ばせるこのトロイア人に。
 彼は大変誠実で従順であるように装い、1266
 高貴らしく見せ、自分の行ないには口が堅そうに見せ、
 あらゆる恭順な振舞いを上手にすることができ、
 宴会や舞踏会では彼女に侍り、
 彼女が神殿に行き来する際には付き添い、1270
 恋する貴婦人が現れるまで食事をとらず、
 彼女のために、私には何だか分からないが、
 紋章のような飾りを付け、よく歌を作り、
 馬上槍試合をし、多くの武芸を演じ、1274
 彼女に恋文、記念品、ブローチ、指輪を贈った——
 さて彼は恋人にどのように仕えるかお聞き下さい！
 彼は飢えと、海上での災難のために
 死ぬ危険に陥り、
 孤独で寂しくなりながら、ようやく祖国から逃れ、
 部下の者たちは嵐に遭って四散してしまったところに、
 彼女は、彼の手し、自分の体を、自分の国土も、1281
 差し出したのである。彼女はカルタゴ以外の土地でも
 女王として君臨することができ、
 十分喜び楽しく生涯を送れたのに、何をか言わんや。
 あれほど固く誓ったアエネアスは、1285
 しばらくすると自分の恋の手管に飽き、
 真剣な恋の熱情はすべて吹飛び冷めてしまった。
 彼は密かに自分の船団を準備し、
 夜陰に乗じてそっと去ろうと図った。
 デイドはこれを怪しみ、1290

二人の愛はうまく行っていないと感づいた。
 彼は夜ベッドで寝ていると溜息をつくからだ*。
 彼女はすぐになぜいらしているのか彼に尋ねる、
 「なぜですか、ねえ、私の最も愛しいお方？」
 「その通り」と彼は答えた、「夜中に父の霊が 1295
 睡眠中に出てきてわしをひどく責め苦しめたのだ。
 さらにメルクリウスもわしに伝言を差し出されて、
 イタリアの征服へとさっそく出帆することが
 わしの必然の運命だ、と言うからだ*。
 そのため、わしは心が張り裂けそうなんだ！」 1300
 そう言うと空涙をはらはらと流し、
 彼女を両腕にかき抱くのである。

「本気ですか。そんなさるおつもりですか。
 あなたは私を妻に娶ると誓われなかったですか。
 ああ、私をどんな女になさるおつもりですか。 1305
 私は高貴な家柄の女で女王ですよ。
 こうして面目なく妻から逃げる積りはないでしょう？
 生まれたことが呪わしい、ああ！ どうしましょうか」
 手短に言うと、この気高いディド女王は、
 聖堂に赴いて、生贄を捧げ*、 1310
 跪き、泣き叫ぶのである、語るもあわれなほど。

彼に熱心に訴え、彼の^{とりこ}虜になることや、
 最もいやしい地位の召使い女になることを申し出る。
 彼の足許に倒れ、気絶しそうになり、
 輝く金髪を振り乱して言う、 1315

「どうか、お慈悲を、一緒に連れて行って下さい！
 近くに住むここの諸侯たちは、ただあなたとの^{よしみ}
 誼 だけのために、私を抹殺するでしょう。
 だからあなたがお誓いしましたように、私を今 1319
 正式の妻とみなして下さるならば、その時、今夜
 今すぐあなたの剣で私を殺す許しを与えましょう！
 その時あなたの妻として死ぬますもの。
 お腹に子どもがいます、この子の命を授けますから*！
 ああ、お慈悲を！お心に憐みをお持ち下さい*！」

しかしこの懇願は少しも役に立たなかった。 1325
 一晚彼女をぐっすり眠ったままにさせておいて、
 抜け出して仲間のところへ行き、
 裏切り者として、イタリアという
 大きな国に向かって出帆したからだ。 1329
 かくして彼は悲しみ苦しんでいるディドの許を去り、
 かの国でラウィニア*と呼ばれる婦人と結婚したのだ。

彼はディドの睡眠中に彼女の許から抜け出すと、
 外衣*を残し、剣も、すぐベッドの頭の位置に
 立てかけたままにして去った。自分の船団へと
 密かに抜け去る時、それほど急いでいたのだ。 1335
 不幸せなディドは目覚めた時、彼を思いめぐらして
 その外衣に何度も何度もキスして、言った、

「ああ愛しい外衣よ、ユピテル様のご満悦の間に、
 わが魂を連れて行って、この苦しみを解いておくれ！
 私は運命の軌道を完全にたどり終えたから*」 1340
 こうして、ああ、アエネアスから救いもなく、
 このあと彼女は二十回も気を失った。
 そして妹のアンに悲しみを訴え終えると
 ——その悲しい訴えについて書くことができない、
 書くとともに可哀想で仕方がなくなるからだ——1345
 乳母*と妹に
 火とその他の物をすぐに持ってくるように命じて、
 生贄を捧げたいと言った——
 それからうまく頃合いを見計らうと、
 生贄の炎の中に飛び込んで、 1350
 アエネアスの剣で自分の心臓を貫いた*。

しかし、原作者*が語るように、彼女はこう言った。
 つまり、彼女は傷つく前か、息絶える直前に、
 すぐにこのように始まる手紙*を書いたのだ。
 「白鳥がいざ最期という時に 1355
 鳴き出します*、それと同じように、
 この期に及んで私の悲しい気持ちを訴えたく存じます。
 私は再びお戻り下さることを

望んでいるわけではありません、
 望みはすべて無駄であることは

よく分かっておりますから。
 だって神々は私を見放していますもの。 1360
 とはいえ私の名声はあなたのせいで失われましたから、
 私はもう少しも良くならないとはいえ、
 書面で一言認めても恐らくあなたには
 通じないでしょう。

なにぶんにもあなたの船を吹きやったその風が、1364
 正にその風があなたの^{まこと}誠を吹き飛ばしたのですもの」
 ところでこの手紙の全容を記憶に留めようと思う人は、
 オウィディウス*をお読みになれば、
 それが見つかるでしょう。

カルタゴ ノ 女王ニシテ、殉教者タル
 ディド ノ 伝、ココニ終ワル

4

ヒュプシピュレ伝とメーディア伝

殉教者タル、ヒュプシピュレ ノ 伝
及ビ メーディア ノ 伝、ココニ始マル

あなたは不実な恋人たちの祖イアソン公*、
あなたはやさしい創造物たる気高い女性を
むさぼり、破滅させるずるい男、 1370
あなたは威厳ある風采を利用して、
貴婦人を誘惑し、おびき寄せ*、
喜びを詰め込んだあまい言葉を遣い、
柔順と謙遜な態度をとり、
苦痛と悲しみを装い、 1375
見せかけの誠実ある振舞いにより誘惑した。
他の人は一人しか裏切らないところ、
あなたは二人も裏切った！
ああ、あなたは愛のために死にたいと
誓うことがよくあるが、 1378
その時、あなたは、あなたが愛と呼ぶ、
邪悪な喜び以外、心身の煩いすら感じておられない！
もし私が十分生きられれば、あなたの同類を
世に知らしめるため、 1381
わが祖国イギリスの言葉で、あなたの名を広めよう！
イアソン、攻めるぞ！ そら、あなたを求めて
角笛が高鳴ったぞ*！
だが、確かに、不実な恋人たちの手にかかって
愛がこのように成り行くことは、残念で悲しい*。 1385
なぜなら、愛を高く贖った人よりも、
また恋愛闘争において幾多も打ちすえられて
血を流す人よりも、
彼らは、いい恋をして、したり顔をするだろうから。
何しろ狐が肉の柔らかい雄鶏にありつけるようなもの、
狐が嘘をついて雄鶏を騙して食らったとしても、 1390
それを味わえるのは金を払って買った
善良な飼い主と同じだから。
飼い主がその雄鶏を所有する権利と
当然の理由を持っていても、
夜には狡い狐が自分の分け前に預かろうとするだろう。
イアソンにこの実例がヒュプシピュレと
女王メーディア*との関係で見られたのである。 1395

[1]ヒュプシピュレ伝

グイド*がわれらに語るように、テッサリア*には、
ペリアス*と呼ばれる王がいて、

彼にはアイソン*と呼ばれる兄がいた。
アイソンは老齢のためにほとんど歩けなくなると、
自分の王国全体の支配権をペリアスに譲り、 1400
彼を領主であり王にした。
このアイソンから、かのイアソンは生まれた。
イアソンの盛時には全土において
彼ほどの高貴な振舞いをし、鷹揚で、
力強く活動力のある名高い騎士はいなかった。 1405
父の死後うまく身を処して力を維持したので、
敵対したがる者は誰もおらず、
彼に敬意を表し、親しく交わろうとした。
こういうことからペリアスはひどく妬んだ。
イアソンは領地の諸侯たちの愛顧を得て 1410
大いに引き上げられて、とても高い地位に
就くかもしれないので、そうすれば自分は
支配の座から下ろされるかもしれないと想像した。
ペリアスは、夜、心の中で、
自分の^{はかりごと} 謀^{はか}の中傷をうけずに 1415
イアソンをいちばんうまく消せる方法を謀り、
熟慮した、ついにどこか遠い国へ
イアソンを派遣してやろうと決め、
そこへ遣ればイアソンを消すことができると思った。
これがペリアスの考えだった、もつとも、 1420
諸侯たちがこれに気づくといけなように、
イアソンに愛情や溺愛の態度を大いに示した。
世の評判は広く駆けまわるように、たまたま、
エーゲ海の東方、トロイアのかなた、
コルキス*と呼ばれる小島に、 1425
大変美しく輝く金の羊毛を持つ
一匹の雄羊が見られ、
それに匹敵する物はどこにも見られないという
噂や評判が至る所でたまたま生まれた。
しかしそれはいつも一匹の竜に守られ、 1430
方々で、他のあまたの怪物に護られていた、
火を吐く真鍮づくめの二匹の雄牛にも
見張られ、見張りにはさらに多くの他の獣もいた。
それにもかかわらず、こういう話もあった。 1434
くだんの羊毛を手に入れたと思う者は誰であれ、
それを手に入れる前に、二匹の雄牛と竜と、両方とも
相手にして戦わねばならないということだった。
そしてその小島の領主はアイエテス*王であった。
ペリアスはそこで次のような悪巧みを思いついた。
甥のイアソンに、その土地に向けて出帆し、 1440
存分に楽しんできなさいと、熱心に勧めてやろうと
思って、言った、「甥殿、ひょっとしたら、
お前はかの有名な宝物を手に入れて
わしの領内にそれを持って帰れるような 1444

栄誉がお前に生じることがあるかもしれないなら、
 わしには大いなる喜びであり名誉となろう。
 その時はお前の働きに報わねばならぬ。
 わしはどんな費用も惜しまぬつもりだ。
 供にどんな者どもを連れて行くかは自分で選ぶがよい。
 さあどうだろう、この船旅に挑戦してみる気はあるか」
 イアソンは若く、血気盛んだったので、 1451
 この度の企てを実行することを引き受けた。
 すぐにアルゴス*は船を建造し始め、
 怪力ヘラクレス*はイアソンの供をすることになった、
 イアソンは他に多くの者たちを供として選んだ。 1455
 ところで他に誰が供をして出かけたか尋ねたい人は、
 『アルゴナウティカ』*に向かわせよう、
 何しろフラックス*は随分長い話にしているのだから。
 舵手ピロクテテス*は風向きが良くなると、
 すぐに帆を揚げ、 1460
 テッサリアと呼ばれる生国から船足を速めた。
 潮路はるばる船を帆走させて、
 ついにレムノス島*に到着した——
 これはグイドには述べられていないけれども、
 オウィディウスが『書簡集』*の中でそう語っている。
 この島のレディであり女王は、 1466
 輝く人、若くて美しいヒュプシピュレだった、
 かつての王、トアスの娘だった。
 ヒュプシピュレは遊びに出かけていた。
 海のそばの崖の上を歩きまわっていると、 1470
 そのうちに或る小山の上から下を見やった。
 するとそこにイアソンの船が着こうとしていた。
 彼女は善良な気持から急いで人を遣り、
 誰か他所者が嵐に遭って夜の間に 1474
 そこに吹き流されてきたのかどうか確かめるためと、
 かつてどんな人であれ救うために行なったようにした。
 他所者を援助して、真の親切心と
 奥ゆかしい行為を示して彼らを喜ばせるためだった。
 使者*は急いで降りて行くと、 1479
 イアソンだけでなくヘラクレスもいることが分かった、
 彼らは元気を取り戻すためと外気に当たるために
 小型船に乗って上陸しに来たのだった。
 その日の朝は穏やかに晴れていた。
 使者は途中で彼らに出会った。 1484
 彼は大変如才なくこの二人の貴種にあいさつして、
 彼女からの伝言を渡し*、すぐに尋ねた。
 船は損傷したのかどうか、何か困り事があるかどうか、
 水先案内人を必要としているかそれとも糧食かと。
 必ず援助すべきであるというのが、
 徹底した女王の志だったからだ。 1490
 イアソンは憤ましく静かに答えた。
 「お方様、御親切には心より感謝いたします。

われらは、今のところ、本当に必要なものは
 何もございません。しかし疲れておりますので、1494
 風向きがわれらの船路に都合よくなるまで、
 海から離れて寛ぐためにやって来たのでございます」
 このお方様は海岸沿いをお供の者を連れて、
 ぶらぶら戯れ歩きつつ崖のそばまで来ると、
 イアソンともう一人*が、前にあなたがたに話した様に、
 このような事*を話しながら、立っているのを見つけた。
 ヘラクレスとイアソンは、 1501
 このお方が女王様であることを見てとって、
 この貴婦人を迎えるやいなや丁重に挨拶した。
 彼女の方は注意深く観察して、彼らの立居振舞いや、
 服装、言葉遣い、顔つきによって、 1505
 高い位の貴族たちであろうということが分かり、
 この見知らぬ男たちを
 城に案内して大変な敬意を表して遇し、
 彼らが潮路で受けた
 苦しみや骨折りについてたずねた。 1510
 その結果、一日、二日、三日経つうちに、
 女王は、船中にいた人びとにより、
 二人は名高いイアソンであることと、
 大いなる評判を得ているヘラクレスであること、
 彼らはコルキスへの冒険を試みていることを知った。
 すると女王は彼らに今まで以上に敬意を払い、 1516
 ますます長く彼らと時を過ごすようになった。
 彼らは正真正銘立派な人たちであったからである。
 わけても、女王はヘラクレスと最も多く話を交わした。
 女王はヘラクレスに心の中を打ち明けた。 1520
 真面目で、賢く、誠実で、言葉遣いには慎重で、
 別にどんな恋愛感情も、
 また悪い下心もなさそうだったから。
 ヘラクレスはイアソンを大そう褒め称え、
 太陽に届くほど彼を持ち上げ、 1525
 上に存する天の、その下広し、といえども、
 彼の半分も愛に誠実な男はいないと言い、
 賢く、勇敢で、信頼でき、しかも裕福であると言った。
 三つの点で彼に匹敵する者はいないということで、
 心の寛さと元気さにおいては 1530
 生きとし生けるもの、死んだものすべてを凌駕し*、
 そのうえ大変立派な貴族であり、
 テッサリアの王になると思われていると述べた。
 欠点といえば、恋愛には臆病で、
 はにかんで物が言えなくなること。 1535
 恋をしていることを人に気づかれるくらいなら
 自殺を試みて死ぬほうがよいと思っていることだと。
 「時を得てイアソンが彼の位に見合う妻をどこかで
 見つけてくれさえすれば、その時私が生きているなら、
 神に誓ってイアソンに私の血と肉を捧げるであろう。

妻になる人はこの元気のよい騎士と共に 1541
 大変楽しい生活を送れるだろうから」と付け加えた*。
 こういうことはすべて前の晩に
 イアソンとヘラクレスとの間で策動されていた。
 ここにおいてこの二人によって邪な欺瞞が 1545
 うぶな女王と親しくなるために仕組まれたのだった！
 この女王を騙すことが彼らの同じ意見だったから。
 イアソンは乙女のようにはにかみ、
 哀れみを誘う様子をして見せたが、何も言わず、
 彼女の顧問官たちと官吏たちに 1550
 すばらしい贈り物を惜しみなく与えた。
 願わくは私に彼の求愛の一切を詩にする
 暇と時間があればいいのになあ！
 けれどももしこの宮廷に不貞な恋人がいるならば、
 今その恋人自らがするのと全く同様に、 1555
 イアソンは誤魔化しをし、あらゆる狡い仕打ちをした。
 皆さんにはもうこれだけにしておくが、
 原作*を読んで下されば、その事の顛末を語っている。
 要点はこうである。イアソンは
 この女王と結婚し、彼女の財産から 1560
 船の供給に欲しいものなら何でも取り、
 女王との間に二人の子どもをもうけたすえに、
 帆を揚げて去り、もう彼女に会うことはなかった。
 女王は、もちろん、彼に手紙を送った。 1564
 その内容は長すぎるので書いたり述べたりできないが、
 彼の大嘘を責め、
 自分をいかほどか憐れんでくれるよう彼に懇願した。
 そして二人の子どもについて彼女はこう言った。
 子どもたちはだまし方を知らないことを除けば、
 むろん、あなた、イアソンに瓜二つですよ。 1570
 そして時間が長く経たないうちに、神に祈った、
 イアソンの心を自分から奪った女*もまた、
 イアソンの不実が分かりますようにと、
 しかもその女がその女の子二人共殺すことになり*、
 彼が思い通りにする女たちは皆そうなりますようにと。
 女王は生涯イアソンに対して誠実で、 1576
 彼の妻だとして、貞淑を守ったが、
 決して心に喜びの灯はともらず、
 彼を愛するが故に、悲痛みがもとで亡くなった。

[2]メーディア伝

イアソン公はコルキス島へやって来た。 1580
 彼は恋に貪婪な男でまるでドラゴン*だ。
 物は常に形を持つことを求めて、
 一つの形から別の形へ移っていくように、
 また底なしの井戸のように、
 不実なイアソンはそわそわ落ち着かない。 1585

何しろ情欲への望み断ちがたく、
 家柄のよい女性と快楽を味わうこと、
 これが彼の楽しみであり幸せとなっているからだ。
 イアソンはかつて
 コルキスの主要都市であった 1590
 イアコニテス*と呼ばれる町へ旅して、
 その国の王アエテスに、
 やって来た理由を話して、
 可能ならば金の羊毛を手に入れるために、
 全力を尽くすことができるように懇願した。 1595
 王は彼の依頼に同意し、
 然るべく彼に敬意を表した。
 彼の娘で彼の跡継ぎである
 メーディア*は大変聡明で美しかったので、 1599
 今まで誰も見たことがない程の見目麗しい才媛だった。
 王は彼女を宴席に出してイアソンの相手をさせ、
 ホールでは彼のそばに座らせた。
 さてイアソンもまた品がよく、
 君主のようで、大いなる名声も得て、
 顔つきはライオンの如く堂々たる風貌で、 1605
 話しぶりは誠実で、愛想がよく、
 典拠を見なくても、恋の手練手管を
 十分に心得、その求愛の礼儀作法も弁えていた。
 〈運命の女神〉が不幸せを目論んでいたのに、
 メーディアはこの男に惚れ込んでいった。 1610
 「イアソン様、あなたが求めておられる
 この件に関して、お見受けする限りで申し上げれば、
 大変危険なことをお始めになりましたわね。
 この冒険を成し遂げようとなさるお方はどなたであれ、
 私がお助けしなければ、きっと、 1615
 死をまぬがれることはできないと思いますわ。
 私は偉そうに申し上げましたが、とにかく私の望みは
 あなたがお命を失わずに、故郷テッサリアへ無事に
 お帰りいただけるように、お助けすることなのです」
 「王女様」とその時イアソンは答えた、 1620
 「あなたは私が死ぬことや悲しむことを
 心配して下さり、
 またこういう素晴らしい札を持って遇して下さいます、
 生涯かけて私の能力や労力の限り尽くしましても、
 私はこの厚遇に報いることはできないことを
 よく心得ております。
 あなたに感謝しても感謝し過ぎることはございません、
 あなたの^{しもべ} 僕でございます、お助け下さいますよう
 謹んでお願い申し上げます、以上でございます。
 しかし、もちろん、私は死を惜しむつもりは
 毛頭ございません」
 それからメーディアはイアソンに対してこの冒険の

危険性や、闘うことの危うさを詳しく説明した、1630
 さらにどんな危地に立たねばならないか、
 誰もイアソンの命を保証できず、救えるのは
 自分だけであることも話した。
 手短に要点へと話を進めると、1634
 イアソンは誠実な騎士として、メーディアと結婚する、
 というに彼ら二人の間に完全に意見が一致し、
 まもなく夜になれば彼女の部屋を訪うべく
 定めた約束の時刻が決まり、そこにおいて
 彼は神かけてこう誓うことになった。
 何事であろうとも、昼も夜も、決して裏切らず、1640
 生きている限り、メーディアの夫となるということ。
 彼女はここにおいて彼を死から命を救ったのだから。
 それから夜になると彼らは一緒に会い、
 彼は誓いをして、彼女とベッドを共にし、
 翌朝急いで起きて冒険を実行した。1645
 彼女は彼が羊毛を首尾よく手に入れ、
 闘いに勝って終える方法を教えてやったからである。
 そして彼の命を救い、名誉も守ってやったのである。
 まさに彼女は自分の魔法の術によって
 征服者としての名を彼に勝ち取らせたのである。1650
 さてイアソンはこの羊毛を持ち、メーディアを連れ、
 大量の宝物を携えて、故郷に帰った。
 しかし父親の知らぬ間に、メーディアは
 愛しいイアソン公とともにテッサリアへ去った*。
 だがその後イアソンは彼女を台無しにしたのである*。
 彼は裏切り者となって彼女の許を離れたからだ。1656
 彼女の許に二人の幼い子どもを残して去り、
 ああなんと、不実にも彼女を欺いたのである。
 彼はいつでも恋の裏切り者の主役だった。
 それからすぐに三番目の妻となる、1660

クレオン王の娘*と結婚したからである。

これはメーディアが彼女の信実と親切に対して
 まさにイアソンから受けた
 愛の報いであり返礼なのである。1664
 彼女はおそらく自分自身以上に彼を愛したであろうし、
 父と自分の相続財産を捨ててまでしてやって来たのに。
 これがイアソンの騎士道的美徳なのである。
 そのため彼の盛時においてこの地上を闊歩する恋人で
 これほど不実な恋人は見られなかったであろう。1669
 それ故彼女は彼の不実について彼を叱責する時、
 手紙の中でまずこう述べた。
 「なぜ私は体面という境を越えてまで
 あなたの黄色い髪を見て喜んだのかしら？
 なぜあなたの若さと美しいお姿を好み、1674
 計りしれない気品あるあなたの弁舌も好んだのかしら。
 ああ、あなたがあの征服の時に亡くなっておられたら、
 多くの不実もあなたと共に消滅したでしょうに*！」
 オウィディウスは彼女の手紙を詩の形で
 うまく書いておられる、
 それを今ここで私が書くと、冗長になり
 過ぎて駄目になるだろう*。1679

殉教者タル、ヒュプシピュレ ノ 伝
 及ビ メーディア ノ 伝、ココニ終ワル

注

(注の見出しの綴字は原文の綴字を示し、イタリックスで表した。本訳では注釈該当箇所の右上にアステリスク*を記した)

1 クレオパトラ伝

この伝の直接の借用、つまり正確な種本は明らかではない。クレオパトラの物語はボッカッチョ Boccaccio『著名人没落物語』*De casibus virorum et Feminarum illustrium* と『著名婦人伝』*De Claris mulieribus* 中に見られるので、どちらかを参照したか、あるいは両方参照したかであろう。両方を表向きの種本とするのがよいであろう。チョーサーは自由に利用して作ったようで、両方を主な典拠としてあげられよう。

*581 プトレマイオス王 *Tholome* この綴りは古フランス語の異形で、Ptolemy のこと。クレオパトラの父と二人の弟がプトレマイオスの名称を持つ。ここではおそらく年上の弟プトレマイオス 13 世（在位紀元前 51・48 年）のことを指すであろう。クレオパトラは父の死後（紀元前 51）年上の弟と共治して女王に任命された。この弟がアレクサンドリア戦争で死ぬと、クレオパトラはまだ子どもにすぎなかった弟と共治して統治したが、4 年も経たないうちに弟を殺害して、単独の支配者になった。

*582 クレオパトラ *Cleopataras* *Cleopatra*. エジプトのプトレマイオス王朝最後の女王で、クレオパトラ 7 世（紀元前 69・30 年、在位紀元前 51・30 年）のこと。魅力ある美貌と教養、機知をもち、古代で最も著名な女性。父の遺言により、弟プトレマイオス 13 世（同時に夫）と共治したが、弟方に追われ（紀元前 49 年）、エジプトに進軍してきたカエサルとの間に息子カエサリオンをもうけるが、カエサルの死後エジプトに帰り、息子に王座をあげてやるために、プトレマイオス 14 世を

殺す。紀元前 41 年アントニウスの愛を得て結婚し、三子をもうける。アントニウスの後ろ盾を得て王国の維持に尽力するが、紀元前 31 年アントニウスと組んで、オクタウィアヌス率いるローマ軍とアクティウムで戦ったが、敗れてエジプトに逃げ帰り、毒蛇に咬ませて自殺する。ウェルギリウスはクレオパトラの物語をアエネアスの神盾に描いた。『アエネアス』8 675-713 参照。

* 583-84 一人の元老院議員が派遣されてやって来る事件が起こる時 一人の元老院議員 *senatour* (=senator) とは、後述のようにアントニウスのことをさすが、彼は元老院議員ではない。將軍であり、護民官。後にコンスル（執政官）職に就いた。アントニウスがエジプトにやってきたのは、ギリシア北部のフィリッピの戦い（紀元前 42 年）の後まもなくのことである。

簡単に史実をのべると、ユリウス・カエサルが暗殺された後、カエサルの腹心であったアントニウスとレピドゥス、それにカエサルの相続人に指名されたオクタウィアヌスとが「国家再建のための三人委員」に指名され（第二回三頭政治）、カエサルの勢力を引き継いで、紀元前 42 年にギリシア北部のフィリッピでカエサルを暗殺した主犯のブルトゥスとカッシウスたちの軍勢を撃破した。そして勝利者三人はローマの領土を分け取った。オクタウィアヌスはヨーロッパ、レピドゥスはアフリカ、アントニウスはエジプト、ギリシア、中東を得た。この後、レピドゥスは力を失い、アントニウスとオクタウィアヌスの二人は対立を深めていく。まだ若く経験不足であったオクタウィアヌスは次第に経験を重ね、主にイタリア以西での活躍でローマ人の支持を集め、逆にローマ人に人気があったアントニウスは東方遠征での失敗やエジプトの女王クレオパトラとの関係の重視などで次第に支持を失っていった。ついに紀元前 32 年に両者は全面的な戦いに突入し、翌紀元前 31 年にギリシア西部のアクティウムでオクタウィアヌス麾下の艦隊とアントニウスとクレオパトラの連合軍とが決戦に至り、オクタウィアヌス軍が勝利を収めた。さらにエジプトに逃げ返ったアントニウスとクレオパトラをオクタウィアヌスは追撃し、紀元前 30 年二人を自殺に追い込み、この戦いを終わらせた。この結果、ローマにはオクタウィアヌスに対抗しうる人物はいなくなった。

* 588 アントニウス *Antonius* Marcus Antonius（英語名 Mark Antony）のこと。マルクス・アントニウス（紀元前 82 頃 - 30 年）のこと。ローマの最も偉大な將軍の一人、また政治家。エジプトの女王クレオパトラとの情事で華やかな経歴を台無しにした（上掲注 582）。クレオパトラとの情事を利用され、ローマ世界の権力の好敵手ガイウス・オクタウィアヌス（後にガイウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアヌスと改名）によって、有利な立場を変えられ、アクティウムの戦いで、打ち破られ、翌年自殺した。クレオパトラとの間に三人の子をもうけた。

* 589-91 〈運命の女神〉についてのよくやるやり方について、特に「修道士の話」2136-42、2763-66 参照。

* 592 カエサルの姉 オクタウィアヌスの姉オクタウィア *Octavia* のこと。先夫の死後アントニウスと再婚した（アントニウスも先妻フルウィアの死後の再婚だった）が、アントニウスのクレオパトラへの愛ゆえに、彼に離婚された。アントニウスの死後、彼の先妻フルウィアやクレオパトラとの間にもうけた子らも引き取って養育し、美德の鑑として名高かった。なお、カエサルとは、幼名オクタウィウス、のちカエサル・オクタウィアヌスと名のつた初代ローマ皇帝アウグストゥスをさす。

* 595 カエサル *Cesar* Caesar. 上述のオクタウィアヌス・カエサル、初代ローマ皇帝アウグストゥス *Augustus*（紀元前 63 - 紀元後 14 年）のこと。もとの名はガイウス・オクタウィウス *Gaius Octavius* で、母はユリウス・カエサルの妹ユリアの娘アティアである。ユリウス・カエサルの遺言により養子となり、かつ後継者に指名され、ガイウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアヌス *Gaius Julius Caesar Octavianus* と名のつた。初めアントニウス、レピドゥスと三頭政治を行なうが、レピドゥスの死後アントニウスとローマの領土を二分統治する。紀元前 31 年アントニウス、クレオパトラの連合軍をアクティウムの海戦で破り、ローマの単独支配者となる。元老院からアウグストゥス（「崇高なる者」の意の尊称）の名を得る。事実上は専制君主であった。以下、オクタウィアヌスと表記する。

* 614-15 チョーサーは愛の神の命じた言葉（F576-77）にきちんと従っている。後の 622-23 行も同じ。

* 624 オクタウィアヌス *Octovryan* ラテン語名 *Octavianus* またはオクタウィウス *Octavius* のこと。前注 595 参照。

* 634 海上において この海はギリシアの北西部のアンブラキア湾 *Sinus Ambracius*, *Ambracian Bay*、現在のアルタ湾 *Gulf of Arta* である。この記述は、紀元前 31 年オクタウィアヌスがマルクス・アントニウスとクレオパトラに海戦で勝利したアクティウムの戦いに関連している。なお、アクティウムはアルタ湾口の岬の名で、この戦いはその沖合での戦いであった。オクタウィアヌスの艦船は 400 隻であったのに対して、アントニウスの艦船は 200 隻であったが、後者の艦船は前者のそれより二倍も大きいものであったので、両者の勢力は伯仲した。

* 640 引っかけ錨 *the grapenel* 敵の船に引っかけて引き寄せ、自分の船に横付けし、敵の船に乗り込むための錨。

* 647 苦杯 *the cuppe* 底本の注には *the cup of woe* (?) とあるのでこう訳した。

* 649 石灰 *lyme* 石灰は敵の兵士に投げつけて目潰しを食わせるために用いるものであろう。

* 651 万事終わりがするように 格言的。『トロイルスとクリセイデ』3. 6-5「何事も終わりががあるので」（笹本訳）。他に「騎士の話」2636 参照。

* 635-53 この戦いの躍如たる描写は『カンタベリー物語』「騎士の話」2600-20 の生き生きした描写と比較対照すべきであり、特に頭韻の使用に注目すべきである。

敵兵の足場固めを阻むために、甲板に滑りやすい物質をまき散らすくらみを含めて、ここの戦い方の詳細な記述はすべて中世の当時の海戦の記述の通りである。

14 世紀になると炭素と硝石と硫黄を混合した火薬が発明され、当時の人びとは恐るべき発明品と付き合わなければならなくなっていた。大砲はまだ手間のかかるやっかいな多くの問題をかかえた代物であったが、砲火と閃光と轟音は敵に恐怖感を生じさせるのに十分な効果があった。

* 657-62 ボッカッチョとプルタルコスではアントニウスはその場から逃走し、もっと後になって自殺する。

* 663 彼の妻 クレオパトラのこと。

* 697 犯罪者を蛇穴に入れるということはかなり悪名高い中世の暴虐行為だった。

* 678-80、696-701 クレオパトラが蛇穴のなかで死ぬということにしたのは、ここの場面とガウアー（8. 2573-75）だけである。ガウアーはおそらくチョーサーからこの案を得たのであろう。プルタルコスではクレオパトラは（一匹の）蛇に噛ませて死ぬ。

2 ティスベ伝

チョーサーはオウィディウス『変身物語』4: 55-166 に基づき、それに忠実に従っている。逢引の場所の桑の木を省略してい

- る。オウィディウスを基にした物語ではいつものことだが、ここでも変身の部分を省いている。付加した独自の創作部分もある。
- *706 バビロン *Babiloyne* Babylon 古代バビロニアの首都。現在のイラクのバグダッドの南ユーフラテス川の近くにあった。
 - *707 セミラミス *Semyramus* Semiramis アッシリアの首都バビロンを建設し、バビロンの壁を築いたといわれる半ば伝説上の女王。彼女はいくつかの理由により夫のニノスを殺害したと訴えられる。ニノスが死ぬと後を継いで、よく統治したといわれる。中世の作家たちは、バビロンの建設、ズボンの発明、息子との近親相姦を彼女がしたとして、いろいろ言っている。彼女は罪深い異教徒の典型となり、ダンテは彼女を肉欲の罪人たちの圈に入れた(『神曲』「地獄篇」5: 52-60)。
 - *719-20 女性たちのうわさ話が縁結びのきっかけにしているのは、チョーサーが付け加えたところである。
 - *725 ナソ *Naso* オウィディウス *Ovidius*, *Ovid* のこと。ナソは家名である。全名はプブリウス・オウィディウス・ナソ *Publius Ovidius Naso* である。オウィディウスは氏族名、プブリウスは個人名である。なお、このティスベ伝はオウィディウス『変身物語』*Metamorphoses* 4: 55-166 に基づいて制作されている。
 - *773 ポイボス *Phebus* Phoebus. 太陽神としてのアポロンの呼称。「光り輝く者」の意。
 - *774 アウロラ *Aurora* ローマ神話の曙の女神。ギリシア神話のエオスにあたる。
 - *773-75 オウィディウス『変身物語』4: 81-82 「やがて翌日になって、曙光が夜の星たちを追いはいらい、太陽の光が霜の花でおおわれた草の葉をかかわすと」(田中秀央、前田敬作訳)より。
 - *785 ニノス王 *kyng Nynus* king Ninus. アッシリアの伝説的王であり、セミラミスの夫で、首都ニネヴェ Nineveh の創設者と伝えられている。シェイクスピア『真夏の夜の夢』5: 1. 139 参照。
 - *796 ベール *wympel* wimple オウィディウスは『変身物語』において *velamina* (= cover, covering, clothing, robe, garment, veil) (4: 101) としている。これを「マントあるいはヴェール」と和訳されている。チョーサーはティスベのこの被り物を *wimple* とした。これは修道女がかぶる、頭巾またはベール、ウィンプルである。中世では一般の女性も外出用にかぶった。首に巻きつけ、頭からかぶり、顔の横とあごを包む頭巾である。余談ながら、「ゼネラル・プロローグ」に登場する修道女たる女子修道院長エグレンティーンの *wimple* について、'Ful semly hir wympul pynched was' (GP 151) 「彼女のかぶるベールはまことに見場よく襷を入れてあった」とチョーサーは描写している。『女子修道院生の戒律』*Ancrene Riwe* では、修道女にベールをかぶらないように警告しており、グレンティーンの属する女子ベネディクト修道会もベールをかぶらないのがしきたりの一つだった。けれども、たとえベールをつけるとしても、ベールに装飾品をつけたりベールを飾ったりすることは好ましく思われなかった。チョーサーが「見場よく襷を入れてある」と指摘するのは、襷は装飾と見なされ、エグレンティーンは戒律違反をしているのである。彼女は他にも小犬を飼ったり、広い額を見せたりして違反をしている。この戒律はおそらくもう時代遅れの戒律だったのであろう。身を飾りたいという女心、それとともに襷を入れるということは、世俗の流行に対する修道女の関心のあらわれであろう。世俗への関心は聖職者といえども止められないのである。彼の聖職者に対する皮肉っぽい風刺だとされている。
 - *811 おびえた足取りで チョーサーは *with dredful fot* としているが、『変身物語』4: 100 は *timido pede* 〈ふるえる足で〉(田中秀央、前田敬作訳)となっている。
 - *885 重い死の眠りにつく眼 ここでは *hevy, dedful yen* としているが、『変身物語』4: 145 は *oculos a morte gravatos* 〈死の眠りで重くなった目〉(中村善也訳)となっている。
 - *916-23 これらの行は明らかにチョーサーのオリジナルである。

3 デイド伝

ウェルギリウス *Virgil* 『アエネイス』*Aeneid* 第1書—第4書の再話である。最後の16行はオウィディウス『名婦たちの書簡』*Heroides* 7: 1-8 と 7:1312-16 を付随的に使用している。

- *925 マントアのウェルギリウス *Virgil Mantoan* ラテン語名 *Publius Vergilius Maro*. 英語名 *Vergil*, *Virgil*. ウェルギリウス(紀元前70—紀元前19年)は古代ローマ最大の詩人。現在のイタリアのマントア(正確にはマントア近くのアンデス、今のピエトラ)で生まれた。928行の『アエネイス』*Aeneid* が主作品で、皇帝アウグストゥスの依頼を請けて書かれた。その他に『田園詩』や『農事詩』がある。
- *927 アエネアス *Eneas* Aeneas. ギリシア・ローマ神話(伝説)の英雄。美貌をもって聞こえるアンキセスと愛と美の女神アフロディテ(=ウエヌス)の子である。トロイア戦争が起こるとトロイア軍に身を投じ、アフロディテとポセイドン(=ネプトゥヌス)両神の庇護の下に大いにギリシア軍を悩ましたが、城が落ちると、生き残ったトロイア人を統治するよう運命づけられ、アフロディテの教えに従って、父と妻子とともに囲みを破ってイタリアのラティウム目指して船出したが、女神ヘラの怒りを買って海上で苦難を受け、カルタゴ、シチリアに漂着した後、ようやくラティウムに達し、その地の王の娘ラウニアを娶り、ローマ建国の基礎を築いたとされる、トロイアの勇士で、古代ローマ建国の祖。ウェルギリウス『アエネイス』の主人公。
- *928 ナソ *Naso* オウィディウスのこと。上掲725行注参照。
- *930 ミネルワ *Mynerve* Minerva. ローマ神話で、知恵・工芸・戦争の女神。ギリシア神話のアテナと同一視される。930-47行は『アエネイス』第二歌の要約である。
- *931 シノン *Synoun* Sinon. アイシモスの子、オデュッセウスとは従兄弟で、オデュッセウスに従ってトロイアの戦いに従軍する。トロイア軍の捕虜となり、アテナ(ミネルワ)の神への捧げものとしての木馬の中にギリシア兵を忍ばせるといふ、ギリシア軍のトロイアの木馬の陰謀に力を貸した。その結果トロイアは落城した。
- *930 トロイア *Troye* *Troia* Troy. 小アジア北西部にあった古代都市。トロイア戦争の地。遺跡はホメロスの叙事詩の世界の存在を信じたシュリーマンによって発見された。別名イリオン。
- *934 ヘクトル *Ector* Hector. トロイア王プリアモスの長男、アンドロマケの夫。トロイア軍の総大将。パトロクロスを殺したが、パトロクロスの親友アキレウスと一騎打ちになり、アキレウスに殺された。その亡霊が現われてアエネアスに逃れるよう勧めた。
- *936 イリウム *Ylioun* Ilium. 元来トロイアの別名(ラテン語名)であるが、時にはプリアモス王の王宮、またはトロイアの主砦を指す。ここではその狭い意味。
- *939 プリアモス *Priamus* Priam. トロイアの最後の王。トロイア戦争では高齢のため、実戦に加わらず、祖国の滅亡と息子

たちの死を見守る悲運の人となった。アキレウスの子ピュロスに殺される。

* 940-41 『アエネイス』2 6-9 〈「急いで逃げよ、わが子よ、苦闘はもうこれまでだ」〉(岡道男、高橋宏幸訳) 参照。

* 941 アスカニオス *Ascanius* アエネアスと妻クレウサとの間に生まれた子。

* 941-42 『アエネイス』2 723-24 〈父を背負うため身をしゃがめた。幼いイウールスはわたしの右手に／手をまきつけて、そろわぬ足取りで父に従う〉(岡道男、高橋宏幸訳) 参照。

* 943 アンキセス *Anchises* アエネアスの父で、ウェヌスの夫。神でなく人である。

* 945 クレウサ *Creusa* トロイア王プリアモスの娘。トロイアではアエネアスの妻。トロイア落城の夜、夫からはぐれて死ぬ。『アエネイス』2: 738-39 〈ああ、なんと、妻のクレウサを失った。運命ゆえに／立ち止まったのか、道に迷ったのか、あるいは転んで座り込んだのか〉(岡道男、高橋宏幸訳) 参照。

* 950-55 『アエネイス』第三歌を簡単に要約。『名声の館』198-221 参照。

* 959 リビア *Libie* *Libia*. 古代の地勢ではエジプトを除く北アフリカ西部の地域。この作品ではカルタゴを中心とするディドの領地を指している。他に 992, 1123 など参照。

* 964-66 『アエネイス』1: 312 〈隠してから、彼はアカーテスを供に二人だけで出かけ〉(岡道男、高橋宏幸訳) 参照。それから『名声の館』226 参照。アカテス *Acates* アエネアスの腹心。

* 971 一人の女狩人 女狩人に変装したウェヌスである。『アイネイス』1. 314-20 と『名声の館』229 参照。

* 978-82 『アエネイス』1: 321-24 〈彼女から先に「もし」と言った。「お若い方、教えてください。わたしの／姉妹の誰かを見ませんでしたか。ここらで迷っているかも知れません。／箴と山猫の斑の皮を身につけています。／あるいは泡を吹く猪を叫びを上げて追っています」〉(岡道男、高橋宏幸訳) 参照。

* 983-93 『アエネイス』1: 325-40 より。

* 1005 シュカイオス *Sytheo* *Sichaeus*. フェニキアの首都タイヤの富裕な僧侶で、ディドと結婚したが、シュカイオスの富を妬み、財産を奪おうとしたディドの兄ピュグマリオンによって殺された。シュカイオスの亡霊がディドに逃げるよう警告したので、彼女は財産を携えて北アフリカに逃れ、そこでカルタゴを建設した。

* 994-1014 『アエネイス』1: 341-414 一参照。

* 1020 チョーサーは現実主義的な考えの持ち主である。

* 1033 トロイアの王子アエネアスは、チョーサーによって中世の騎士に見立てられている。中世騎士物語の騎士たちは涙を流してよく泣くが、彼らが盛んに泣くことは女々しいと思われていなかった。中世では水は罪を清める力があるとされ、涙でさえ神聖視されたのである。

* 1039 天と地を造り給わった神 ユピテルのこと。

* 1061-64 『アエネイス』1: 613-14 〈シードンのディドは初めて彼を見て驚きに打たれた。／勇士の不幸の大きさを思い、こう話した。〉(岡道男、高橋宏幸訳) より。

* 1066-71 『アエネイス』1: 588-91 〈姿を現わしたアエネアスは明るい光の中に輝いて、／その顔と両肩は神と見紛った。そのように美しい／髪を母神が息子に与え、青春の照り映える／赤みと喜ばしい目の輝きを吹き込んでいた〉(岡道男、高橋宏幸訳) より。チョーサーはアエネアスを *knyght* ととして、古典古代の世界の話を中世の世界の話にしている。

* 1072 ウェヌスに似て ウェヌスはアエネアスの母である。

* 1075-77 チョーサーのアイロニー。

* 1079 その哀れみと共に愛も生まれた *with that pite love com in also* *Pity's akin to love*. ということわざがある。これを漱石は「可哀想だた惚れたって事よ」(『三四郎』) と訳している。

* 958-1102 『アエネイス』1: 305-642 に大体一致する。そのうち 1086-1102 行は『アエネイス』1: 617-42 に基づく。

* 1110 薬味 控えの間に退く前に薬味を混ぜた酒を供するのは中世の習慣である。ここはチョーサー自身の筆に成るもの。

* 1114 駿馬 *courser* この馬は戦争や馬上槍試合、パレードに乗る時に役立ち使われる、速くて元気のよい馬である。軍馬。後の 1196 の若い騎士たち *younge knyghtes* の乗る馬 *coursers* でもある。

* 1115 軍馬 *stede* *steed*. この馬は素晴らしい、気品のある、元気で大きい馬。軍馬として使われる。

* 1116 乗用馬 *palfrey* この馬は(軍馬に対するものとしての) 日常乗るための(見事な) 馬。婦人が乗用する馬でもある。

* 1122 フロリン金貨 *foreyns* *florin(s)*. フロリン金貨は最初 1252 年にフィレンツェで鑄造され、イングランドでも国際基軸貨として流通していた「フロリン金貨」(3 シリング相当) と解釈することが妥当であろう。なぜなら、英語で「フローレンス」*florences* という通称名で呼ばれていたからである。ヨーロッパの数か所で鑄造された同名の硬貨と混同されるが、フィレンツェの硬貨は表に、花の模様が、つまりフィレンツェの紋章「百合の花」が刻印されていたので「フロリン貨」と呼ばれたのである。フィレンツェの「フロリン金貨」は 1252 年から 1523 年まで国際通貨として広く流通した。北ヨーロッパではフランドル鑄造の「フロリン金貨」が流通した。イングランドではエドワード三世が鑄造した「フロリン金貨」があったが、この金貨は使用された金が過大評価されて信用をなくしてしまい、1344 年 1 月から 8 月までの短期間しか流通しなかった。チョーサーがこの作品に取りかかっていた頃、この金貨はイングランドでは流通していなかった。『アエネイス』を書いた紀元前のウェルギリウスの頃のローマではこの金貨はなかったのも、この貨幣の名がここで登場するのは時代錯誤を示している。なお、1372 年・73 年にチョーサーが使節の一員としてフィレンツェを訪れた時には、「フロリン金貨」はフィレンツェで流通していたので、チョーサーはそれを目にしたり使ったりしたであろう。「ディド伝」は地中海が舞台であり、「フロリン金貨」という表現から、カルタゴの町について、チョーサーは当時繁栄していた美しい大都会フィレンツェの町を重ね合わせたのかもしれない。

* 1198 紙のごとく白い *paper-whit* この比喻はこの初期の時代には珍しい比喻である。

* 1204 「騎士の話」1502 〈火の如く元気に跳ね回る駿馬に跨り〉(笹本訳) とほとんど同じ表現。

* 1188-1211 『アエネイス』4: 129-59 から。

* 1218-26 『アエネイス』では、嵐はユノーとウェヌスが予定していたものである。このディドの話ではチョーサーは一貫して神々の役割をできるだけ少なくし、アエネアスに自己の行動責任をとらせている。

* 1212-31 『アエネイス』4: 154-70 から。

* 1232-37 チョーサーはアエネアスの欺瞞を強調し、再び神々の役割を無視する。

- * **1245** イアルバス *Yarbas Iarbas*. アムモンの子で、北アフリカのガエトゥリア（モーリタニアとヌミディアの南の地域）の王。ディドが北アフリカにやって来た時彼女と恋に落ち、彼女にカルタゴの町を建設した。しかしディドはイアルバスの結婚の申し込みを拒絶し、代わりにアエネアスを選んだ。
- * **1292** Robinson 版では *For in his bed she lyth a-nyght and syketh*. Fisher 版では *For in his bed he lyth anyght and syketh*. Riverside 版では *For in hir bed he lyth a-nyght and syketh*; となっている。Fisher 版が文脈から判断すると最も相応しいように思われる。
- * **1295-99** 『アエネイス』4: 351-59 〈「わたしはわが父アンキーセスが、いつも湿った陰で／夜が大地を蔽うころ、いつも火と燃える星々が昇るころ、／夢の中に乱れ悩む幻となって現れることを思い、心がおののく。／わたしの心をわが子アスカニウスが、愛しい君への不正が責める／この子からわたしはヘスペリアの王国と運命の田野を騙し取っているのだ。／いまも神々の伝令がほかならぬユピテルにより遣わされた。／偽りではない。われわれ二人の頭にかけて誓う。疾風を抜けて言いつけを／届けに来たのだ。わたし自身が神を目の当たり光の中に見た。／城壁の中へ入るのを見、その声をこの両耳から胸に飲み込んだ」〉（岡道男、高橋宏幸訳）より。
- * **1310** 聖堂詣での場面はチョーサーが中世的に付け加えたもの。生贄を捧げるところは『アエネイス』4: 652-55 参照。
- * **1323** 妊娠の訴えはオウィディウスが言いだしたのだが、ウェルギリウスは子がないことを遠回しに言っている。
- * **1311-24** オウィディウス『名婦たちの書簡』7 に靈感を得ている。
- * **1331** ラウィニア *Lavyne Lavinia*. イタリアのラティウム王ラティヌスの娘。上掲注 927 行「アエネアス」の項参照。
- * **1333** 外衣 *cloth* をこう訳した。この語の現代英語訳は *cloth, garment, robe* とさまざまである。
- * **1338-40** 『アエネイス』4: 651-53 〈彼の身を包んだ品々よ、運命を神が許したあいだは愛しかつたものよ、／この魂を受け入れ、わたしをこの懊悩から解き放しておくれ。／わたしの一生もこれまで。運の女神がくれた道のりをわたしは歩き通した〉（岡道男、高橋宏幸訳）より。
- * **1346** 乳母 『アエネイス』4: 632 では、乳母はシュカエウスの乳母バルケである。
- * **1162-1351** 『アエネイス』第 4 歌の範囲内の叙述である。
- * **1352** 原作者 オウィディウスのこと。
- * **1354** 手紙 1355-65 の手紙の内容は、オウィディウス『名婦たちの書簡』7: 1-8 に基づく。〈こうして、運命の声にまねかれ、マイアンドロスの流れのほとり、露にぬれた草にふして、白鳥は歌うのです。あなたが語りかけるのは、べつに私の嘆願であなただけを動かすように期待してのことではありません。神にさえ見はなされて、私はこれを書きました。当然のむくいとはいえ、ほまれもきよいかからだもまた心もみじめに失った私には、いまさら言葉を失うことなど、とるにたりません。それにしても、あなたはしかと、哀れなディードーを見捨てて、去って行くおつもりですか。〉（7. 1-8）（松本克己訳）
- * **1355-56** 当時白鳥は死期が迫る時だけ鳴くと信じられた。『鳥の議会』342 参照。
- * **1367** オウィディウス *Ovyde Ovid*. 「オウィディウスをお読みになれば」は、ここではオウィディウスが書いた、書簡詩、『名婦たちの書簡』〈7. ディドからアエネアスへ〉を指す。

4 ヒュブシピュレとメーディア伝

- * **1368** イアソン公 *Duc Jasoun Duke Jason*. イアソンはギリシア伝説におけるイオルコス国の王アイソンの息子。金の羊毛を求めて、コルキス国へ出かけたアルゴ船一行のリーダー。中世ヨーロッパの公爵領は事実上独立した王国であり、その領主たる公爵は王国の国王と同じ意味を持っていたので、チョーサーは公と王を区別する意識は少なかったのであろう。
- * **1371-72** ここは『神曲』「地獄篇」18: 85 〈たいしたものだ、王者の風をいまなお保っている！〉と 91-93 〈ここで手をかえ品をかえ言葉巧みにヒュブシピュレをだました〉（二つの引用とも平川祐弘訳）の表現にやや類似することにロビンソンは注目する。1371 行の表現は「食料仕入れ係りの話」72 〈鷹にするように餌でおびき寄せて敵を討つよ〉（笹本訳）参照。
- * **1383** *Have at thee, Jason! Now thyn horn is blowe!* この角笛のイメージは『神曲』「地獄篇」19: 5 〈いまこそ宣告のラッパが高鳴ってしかるべき時だ〉（平川祐弘訳）という、有罪を宣告された罪人たちの悪事について公の叫びを述べているところから来ているかもしれないが、*Have at thee (= I attack you)* というように、チョーサーは、むしろ狼の獲物の追跡を始めるために、鳴らされる狩人の角笛のことを考えていたとロビンソンは言う。そして *Now thyn horn is blowe! (= Now at you the horn is blown!)* と続けている。チョーサーは、角笛を吹くことによって、イアソンに対してごうごうの非難の声をあげるぞと、はっきり通告しているのである。
- * **1368-95** この最初の 28 行のイアソンについての語りは、この伝のいわばプロローグである。チョーサーの創意によるものであり、彼独自の筆によるものである。
- * **1395** メーディア *Medea* コルキスの王アイエテス（プリクソスの雄羊の金の羊毛の保管者）の娘。キルケーの姪。治療と魔法の力を持っていることで有名。金の羊毛を求めてコルキスにやって来たイアソンと激しい恋に落ち、父親が定めた不可能な任務をイアソンが行なう手助けをした。そして金の羊毛を持ち去るイアソンに同行した。しかし、後にイアソンがクレオンの娘クレウサと結婚しようとしたので、イアソンとの間にもうけた二人の子どもを殺し、クレウサを毒殺して仕返しをした。

〔1〕ヒュブシピュレ伝

チョーサーは主としてガイド・デッレ・コロネ *Guido delle Colonne* 『トロイア滅亡史』*Historia destructionis Troiae* 1: 1368-1455 に頼り、さらにオウィディウス『変身物語』第 7 巻と『名婦たちの書簡』6 に（12 にも）頼ったかもしれない。そしてヴァレリウス・フラックス *Valerius Flaccus* 『アルゴナウティカ』*Argonautica* を付随的に使ったように思われる。またヒュギヌス *Hyginus* 『ギリシア神話集』*Fabulae* も使ったかもしれない。

* **1396** ガイド *Guido* 『トロイア滅亡史』（1287）の作者、ガイド・デッレ・コロネのこと。ガイドは 13 世紀のシチリアの法律家で、1287 年に『トロイア滅亡史』を完成させ、その年に亡くなった。『トロイア滅亡史』はイアソンの物語から始まっている。チョーサーは少なくとも 1461 行あたりまでそれに従っている。なお『トロイア滅亡史』は、ブノア・ド・サントモールのフランス詩『トロイア物語』*Roman de Troie* をラテン語でパラフレーズしたものである。前注参照。

- * 1396 テッサリア *Tessaly* Thessaly. ギリシア東部の一地方、古代ギリシアの北東部に位置する。
- * 1397 ペリアス *Pelleus* ギリシア神話のテッサリアの Pelias のことであろう。海神ペセイドンの子。アイソンとは異父兄弟、アイソンは甥にあたる。グイドには Peleus とある。
- * 1398 アイソン *Eson* Aeson. アイソンの父。
- * 1425 コルキス *Colchis* Colchis. 黒海東部、現在グルジア共和国西部にあった古代の国。コルキスは島ではない。
- * 1438 アイエテス *Oetes* Aeëtes. コルキスの王で、メーディアの父、そして金の羊毛の保管人。
- * 1453 アルゴス *Argus* Argos. アイエテスの孫で、ブリクソスの子。アイソンと彼の仲間アルゴナウテースのためにアルゴ船を建造した。アイソンは彼を難破後に救助していたのである。
- * 1454 ヘラクレス *Ercules* Hercules. ギリシア・ローマ神話の最も有名な人物。ユピテルの子で、怪物退治や不可能を可能にした業績の 12 の難事をやってのけた大力無双で勇敢な英雄。アルケステスを地下界から連れ戻した。アルゴ船に乗ってアイソンと行をともにした英雄たちアルゴナウテースの一人だった。ヒュプシピュレを誘惑する役目をするのはチョーサーの創作のように思われる。もしかするとオウィディウスの『名婦たちの書簡』9 は、ディアネイラからヘラクレスに宛てて激しく責める手紙文であるために、チョーサーはヘラクレスをこの魅力のない性格にすることの方に心が動いたのかもしれない。
- * 1457 『アルゴナウティカ』 *Argonautycon Argonautica* ('the voyage of the Argo') の属格形。1 世紀のローマの詩人ウァレリウス・フラックス *Valerius Flaccus* が書いた 8 巻本の未完の叙事詩のこと。主としてダレス・フリギウスを通して中世に知られた。『アルゴナウティカ』の第 1 巻にはアルゴ船隊員の長い目録がある。このタイトルを正確に引用しているところを見ると、チョーサーはウァレリウス・フラックスを間接ではなく直接知っていた、という説を支持する学者もいる。
- * 1458 フラックス 原文は *he* だが、ウァレリウス・フラックスのことなので、'For *he* ...' を、「何しろフラックスは・・・」と訳した。
- * 1459 ピロクテテス *Philotetes* Philoctetes. アイソンの仲間であり、金の羊毛を求めて、アルゴ船一行がテッサリアから出帆する時の船の舵手。ウァレリウス・フラックスの『アルゴナウティカ』には名は挙げられていない。ここの綴字 *Philotetes* はグイドの綴字で中世ラテン語。恐らく *Philoctetes* の異形であろう。
- * 1463 レムノス島 *the yle of Lemnon* the isle of Lemnos. エーゲ海北東部にある島。むかしウルカヌス（ヘーファイストス）の居所と考えられた。アルゴ船一行の遠征の時にはヒュプシピュレの住まう所として述べられている。綴字 *Lemnon* は、ラテン語 *Lemno*, *-onem* に基づく、古フランス語のように思われる。
- * 1465 『書簡集』 オウィディウスが書いた『名婦たちの書簡』のこと。『善女列伝』(I) 注 G305 行参照。レムノス島については『名婦たちの書簡』6: 50, 117, 136 参照。
- * 1479 使者 ウァレリウス・フラックス（『アルゴナウティカ』2. 326-27）では、使者はイビノエという女性である。古代伝説によれば、レムノス島の女性たちはヒュプシピュレが救ったトアスを除く島の男性たちをすべて殺していた。チョーサーは使者を男性にしている。
- * 1486 彼女からの伝言を渡し *dide his message* his message とあるが、ヒュプシピュレは女性であるので、原文の意味は *gave* (them) her message と解して訳した。
- * 1499 もう一人 ヘラクレスのこと。
- * 1500 このような事 アイソンの一行がなぜここにやって来たかということ。
- * 1526-31 これは宮廷風恋愛の恋人描写の常套的表現である。理想的な夫観としての類似の描写は「女子修道院付き司祭の話」2914-17 にあり、理想的な支配者としての類似の表現は「近習の話」19-27 にある。
- * 1524-42 ヘラクレスの計略はバンダロスの計略と非常によく似ている。『トロイルスとクリセイデ』2: 155-207 参照。
- * 1558 原作 オウィディウスの書簡詩『名婦たちの書簡』6 のこと。後の 1564 行において触れている「手紙」をさす。
- * 1572 アイソンの心を自分から奪った女 メーディアのこと。メーディアの物語を語る時、チョーサーは、彼女がアイソンに復讐するために行った、彼と彼女の間に生まれた二人の子どもの殺害のことはカットしている。しかし、ヒュプシピュレの予言的な呪いの言葉はそれを思い出させる。
- * 1571-74 『名婦たちの書簡』6: 153-56 によっている。

〔2〕メーディア伝

ヒュプシピュレ伝のように、チョーサーはグイド・デッレ・コロンネ『トロイア滅亡史』第 1 巻—第 3 巻を利用し、オウィディウス『変身物語』7: 1-396 と『名婦たちの書簡』12 も利用した。ヒュギヌス『ギリシア神話集』も使ったかもしれない。

- * 1581 ドラゴン *dragoun* dragon. ドラゴンは翼をつけて蛇 *serpent* の尻尾をもつ、巨大な伝説上の爬虫類の形の動物として描かれる。そこから *dragon* と *serpent* とは交換可能な語となっている。中世ではドラゴンは一般に罪の象徴であり、特に異教精神の象徴であった。ここではドラゴンを飽くことを知らない食欲な伝説上の動物とみなし、食欲なアイソンをそれに譬えた。
- * 1591 イアコニテス *Jaconitos* Jaconites. *A Chaucer Gazetteer* によると、歴史的には *Dioscuras* であった。チョーサーが使った地名はグイド・デッレ・コロンネの *Iaconites* に由来する。
- * 1599 メーディア 魔法使いである。彼女は魔法に通じていた。上掲注 1395 行参照。
- * 1653 ここからチョーサーは 1662-66 行を除いてグイドに従うことをやめ、『名婦たちの書簡』12 に従う。
- * 1580-1655 ここは主としてグイド・デッレ・コロンネ『トロイア滅亡史』第 2 書に基づいている。
- * 1661 クレオン王の娘 クレウサという名であった。メーディアに妬まれて殺された。『名婦たちの書簡』12: 53-54、『恋する男の告解』5: 4196 参照。
- * 1670-77 『名婦たちの書簡』12: 11-12（また、どうして私が、あなたの金髪や、あなたの品のよさや、うわべだけの言葉の優しさに、ことのほか心を奪われたのでしょうか）（松本克己訳）から。少し敷衍している。
- * 1679 このアイソンとメーディアの説明では、メーディアの魔術については遠回しにしか述べられておらず、アイソンに対するすさまじい復讐、つまりアイソンとの間にできた二人の子殺しとアイソンの後妻の毒殺についてはまったく述べられていない。それはチョーサーでは捨てられたヒュプシピュレの予言の言葉として表される。1571-75 行参照。

参考文献

- Baugh, A. C. (ed.), *Chaucer's Major Poetry*. New Jersey: Prentice-Hall, 1963.
- Benson, Larry D. (gen. ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd edn. Boston: Houghton Mifflin, 1987.
- Brewer, Derek. *Chaucer and His World*. London: Eyre Methuen, 1978.
- [デレク・ブルーアー著、海老久人・朝倉文市訳『チョーサーの世界—詩人と歩く中世』京都：八坂書房、2010]
- Coghill, Nevill. *Geoffrey Chaucer*. London: Longmans, Green & Co., 1956.
- [ネヴィル・コグヒル著、安東伸介訳『チョーサー』（英文学ハンドブック）研究社、1971]
- Ellis, Steve (ed.), *Chaucer---An Oxford Guide*. Oxford: OUP, 2005.
- Fisher, J. H. (ed.), *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1977.
- Frank, R. W. *Chaucer and 'The Legend of Good Women'*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1972.
- Gray, Douglas (ed.), *The Oxford Companion to Chaucer*. Oxford: OUP, 2003.
- 池上忠弘『14世紀のイギリス文学—歴史と文学の世界—』東京：中央大学人文研究所、2011.
- 平川祐弘訳、ダンテ『神曲』東京：河出書房新社、1992.
- 地村彰之「形容詞からみた Chaucer の人物描写」『大谷女子大学紀要』第15号第1輯 (1980), 1-20.
- Jimura, Akiyuki. *Studies in Chaucer's Words and His Narratives*. Hiroshima: Keisuisha, 2005.
- 河崎征俊『チョーサー文学の世界—〈遊戯〉とそのトポグラフィ—』東京：南雲堂、1995.
- 河崎征俊『チョーサーの詩学—中世ヨーロッパの〈伝統〉とその〈創造〉』東京：開文堂出版、2008.
- 榊井迪夫訳『完訳カンタベリー物語』（上・中・下）東京：岩波書店、1995.
- 榊井迪夫『チョーサーの世界』（岩波新書966）東京：岩波書店、1976.
- 松本克己訳、オウィディウス『名婦の書簡（ヘロイデス）』（「世界文学大系」67）東京：筑摩書房、1967.
- Minis, A. J. (ed.), *Oxford Guides to Chaucer---The Shorter Poems*. Oxford: Clarendon, 1995.
- 宮田武志訳『善女物語』甲南大学文学会、1954。（『善女よもやま話』として大手前女子学園〈1982〉こびあん書房（1987）より発行）
- 中村善也訳、オウィディウス『変身物語』（上）（下）（岩波文庫）東京：岩波書店、1984.
- 岡道男・高橋宏幸訳、ウェルギリウス『アエネーイス』京都：京都大学学術出版会、2001.
- 斎藤勇『カンタベリー物語—中世人の滑稽・卑俗・悔悛』（中公新書749）東京：中央公論社、1984.
- 笹本長敬訳『カンタベリー物語』東京：英宝社、2002.
- 笹本長敬訳『トロイルスとクリセイデ』東京：英宝社、2012.
- 繁尾久『中世英文学点描』東京：伸光社、1982.
- 田中秀央・前田敬作訳、オウィディウス『転身物語』京都：人文書院、1966.

A Japanese Translation of Geoffrey Chaucer's *The Legend of Good Women* (2)

Akiyuki Jimura and Hisayuki Sasamoto*

Department of Secondary Education, Faculty of Education, Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

*Formerly, Professor of Osaka University of Commerce

(Received October 23, 2017; accepted December 4, 2017)

This article consists of three parts: (1) an introduction to Chaucer, (2) a Japanese translation of Geoffrey Chaucer's *The Legend of Good Women* (from 'The Legend of Cleopatra' to 'The Legend of Hypsipyle and Medea') and (3) the explanatory notes and the textual notes of *The Legend of Good Women*. Our translation is based upon Larry D. Benson's text (1987). The two edited texts of A. C. Baugh (1963) and J. H. Fisher (1977) are referred to when necessary. In the translation of Proper Nouns, katakana does not correspond to English pronunciation, but mostly the original language. We have not distinguished the long and short vowels of Greek and Latin, when using katakana. Personification of abstract ideas are shown in angle brackets 〈 〉.